學　報

Kobe　College　Bulletin

ISSN0389－164X

NO. 178

2016.12. 9
神戸女学院
学報委員会

つながりと変革の時

学　長　斉藤　言子

紛争、災害、犯罪、貧困などが、決して他人ごとではなく身近なところで実感せざるを得ない中で、あたりまえの日々、生活を重ねることがいかに恵まれているかを改めて思います。学長職を拝命し、飯前学長から「女性のエンパワーメントを先導してほしい」と引き継ぎの言葉をいただいてから、早いもので任期の半分が過ぎました。前に進むこと、立ち留まること、引き返す勇気、そして、断固として守るべきことと大胆な改革の両輪のつながりとバランスの大切さを事あるごとに感じています。

今年３月には７年に一度行われる大学基準協会による認証評価（大学の理念、教育組織や教員、教育内容・方法・成果、学生の受け入れ、支援など10に及ぶ基準に関して評価が行われます）を受け、適合の認定を受けました。評価に際して、関係各署の教職員には従来の学務業務に加え、自己点検、評価報告書作成のために多大な時間と負担をかけることになりましたが、今後の大学が進むべき方向性につなげる良い機会となりました。平均年齢の高さが指摘されていた教員編成も、新任採用人事により若い教員が増え、新旧相互のつながりの中で、新たなエネルギー、感性、斬新なアイデア、行動力が発揮されてゆくことでしょう。

本学の『ミッションポリシー：神戸女学院大学は、学ぶ者と働く者が共に学院標語「愛神愛隣」に基づくキリスト教の精神を分かち合い、時代の潮流に流されることなく、置かれた場で、利害を超え、自らの役割を感知し、果たし、人にとって真に大切なものを見分ける、共感性の高い人格への成長を目指します』につながる、大学の「ディプロマポリシー」

「アカデミックポリシー」「アドミッションポリシー」を新たに見直しました。来年度に向けてHPにもアップされてまいりますので、ぜひご覧いただき、本学の教育理念をご理解いただければ幸いです。「2018年問題検討ワーキンググループ」からの提言もまとめられました。「愛と奉仕の精神」「豊かな感受性」「論理的思考力」「コミュニケーション力」「専門知識と技能」「創造力と企画力」「主体的に学び続ける力」を本学で育む７つの力と定め、2017年度より新カリキュラムが始まります。また本学では「教育の３つの柱」を定めています。これに伴った昨年度の活動の一部を紹介いたします。

【キリスト教主義】：総合文化学科の学生が課外活動でマニラにおいて「DEAR ME」と題されたファッションショーを開催しました。現地の貧困地域の子どもたち20人が800人を超える観客の前で、ライトを浴び、美しい衣装に身を包み、ランウェイ

を歩きました。子どもたちにとっては、夢のような晴れがましい体験で将来への大きな希望につながったことでしょう。実現までには多くの課題があったことは想像に難くありませんが、神様と学生の思いがつながり、まさに学院標語の「愛神愛隣」が形となった素晴らしい企画、活動、実現に感動しています。

【国際理解】：長期、中期、短期を含め、本学から海外へ121人、海外からは63人の学生が本学を訪れ活発な交流が行われています。新たにテキサス州にあるサム・ヒューストン大学と協定を締結しました。本学にとっては初のアメリカ南部の大学となりますが、早速交換留学が始まっています。この協定は、本学卒業生のご主人がこの大学の教員であるという関わりから実現しました。このような形で卒業生、大学、在学生がつながっていくことは喜ばしい限りです。また、今年10月には音楽学部舞踊専攻の４年生が台湾でのダンスフェスティバルに招かれ、日ごろの成果を発揮し大好評を博しました。

【リベラルアーツ＆サイエンス】：学生たちは学部の壁を横断し学びの場を広げています。音楽学部演奏会には「副専攻プログラム」で楽器や声楽の個人レッスンを受講している英文学科や心理・行動科学科の学生がコーラスやオーケストラの一員として舞台に上がり、「通訳・翻訳プログラム」を履修した音楽学科の学生が曲中での英文ナレーションをつとめ、共に音楽を作り上げました。客席からは「これぞ神戸女学院ならではのリベラルアーツの体現！」との賞賛の声が聞こえました。また、環境・バイオサイエンス学科の研究室と東京大学大学院前特任教授との合同研究で生まれたアミノ酸ゼリーには、神戸女学院産（理学館屋上で養蜂）のはちみつも加えられ、代表的な神戸女学院グッズとなりました。私もちょくちょくいただきますが、翌日はお肌の調子がずいぶん良いように？感じます。是非、お試しください。学びのコラボレーションは益々深く広くつながりその可能性への期待は高まるばかりです。西宮市と本学との連携も強まり、地域と大学、企業と大学がつながり、交流も活発に行われ始めました。そして10月には市と企業、学生が一緒になって開発した甘酒などの商品の販売が始まりました。また、「地域創りリーダー養成プログラム」の取り組み「防災ウォッチ」が西宮市から評価され、今年度、市が実施する防災啓発活動に協力をしています。大学においても、積極的に地域連携に関わってゆくためにも地域交流センターなどの設置を考えてゆかなければならない時期がきています。

学生、保護者からの関心が高い就職に関しましては、キャリアセンターによる充実のサポート体制により、昨年度は98パーセントの就職率、第一希望群への就職状況は80パーセント超と非常に好調でした。130回の就活支援プログラムとのべ150社による企業セミナーも開催されました。企業との深い信頼関係のつながりも非常に心強いものです。

施設面では、図書館本館の中にありました入学センターが、９月よりデフォレスト記念館の向い側（文学館南端）に移転しました。オープンキャンパスなどで訪れる高校生、保護者の皆様の一番に目に付くところです。そして昨年度までは入学センターが入試関連業務に加え大学広報も担っていましたが、まずは神戸女学院大学を知ってもらうために入試広報と大学広報を切り離し、今年度より大学広報は学長室所属となりました。広報環境が猛烈なスピードで変化、多様化してゆく中で、本学もFacebook や YouTube などの SNS（Social networking services）のメディア媒体を通じ積極的に発信してまいります。

４月には学内にセブン-イレブンが開店しました。学生自治会の協力を得て、女子大にマッチした充実の品揃えで、学生たちにも好評です。

最後に私ごとですが、この夏、イタリアのペルージャ音楽祭に招聘され、学生８人も同行しました。古代ローマ以前の美術、史跡に囲まれ２週間、学生たちはレッスン、コンサート、若い音楽家たちとの国際交流など、音楽浸けの日々を過ごしました。彼女たちは私が思っていたよりもずっと優秀で、思いやり深く、行動力に溢れ、たくましい対応力も備えていました。神戸女学院での学びが国際的にも通じる本物であったことを、身をもって体験し自信につなげ、帰国後は顔つきと勉学への姿勢が変わりました。今後の成長が楽しみです。そしてこれこそが、今、教育の現場で盛んに取り上げられているアクティブ・ラーニングなのだと実感しています。私にとりましても、神戸女学院での日々の学びがつながり、次世代を担う女性として自然に確実に学生たちの中で育ち実っていることが確信につながった素敵な夏となりましたことをご報告させていただきます。

神戸女学院特別講演会
「石戸コレクション」でふりかえる神戸女学院

10月１日（土）、講堂で絵葉書研究家の石戸信也先生を講師にお迎えして、『神戸女学院特別講演会「石戸コレクション」でふりかえる神戸女学院』が開催されました。講演会終了後は、キャンパス及び図書館での「石戸コレクション」展示会が、学生ツアーマイスターの案内で行われました。好天のもと、200名を超える方々がご参加くださいました。

ご著書の『むかしの六甲・有馬』（神戸新聞総合出版センター、2011）には、たいへん興味深い記述があります。神戸女学院が西宮市岡田山に移転した後の神戸山本通の旧キャンパス校舎のうち、理化学館が何とホテルに改装されていたというのです。森院長がその驚きのエピソード、「神戸女学院と富士ホテル」を偶然目にしたことがきっかけとなって、学生ツアーマイスターの研修会を兼ねた特別講演会と展示会開催の運びとなりました。

ご講演では、神戸及び阪神間の戦前の絵葉書や古写真などからなる先生の膨大なコレクションの中から、神戸女学院とも深い関わりのあるえりすぐりの資料をスライドでご紹介くださり、神戸女学院の歴史と伝統を文化史的に解説してくださいました。長い年月をかけて蒐集された資料を俯瞰するからこそ見えてくる学院のさまざまな姿を知る貴重な機会となりました。

石戸先生には、午前中の学生ツアーマイスターの研修会の講師もお引き受けいただきました。また、この日の記念にと、コレクションの中から貴重な「幻の大蔵谷キャンパス」の絵葉書一葉（裏面は学院関係者から卒業生宛のお便り）を学院にご寄贈くださいました。以上、感謝とともにご報告させていただきます。

（院長室課長）

石戸信也先生と「石戸コレクション」

キリスト教学校教育同盟
第６回中堅事務職員研修会報告

８月25日（木）・26日（金）、第６回中堅事務職員研修会が本学キャンパスにて開催され、全国加盟校から14法人25名が参加しました（本学からは５名参加）。テーマは、「時代の担い手としてのキリスト教学校―『建学の精神』の継承―」。ソールチャペルで開会礼拝を守った後、行われた主題講演では本学院森孝一院長を講師に迎え、「キリスト教学校の危機―いくつかの提言」と題して歴史、教育、経営の視点から現在直面しているキリスト教学校の危機、その中での我々事務職員の働きの重要性について語っていただきました。グループに分かれてのディスカッションでは、主題講演についてと事前課題であった「建学の精神の継承」「自校教育」のレポートを元に意見交換を行いました。学校も部署も違い、また建学の精神もそれぞれ違うというメンバーにも関わらず、ほとんど前置きのいらない充実した意見交換の時間が持てたのは、それぞれの建学の精神が全て同じ聖書に基づいている、根底にあるものが同じだという繋がりを感じることができたからだと思います。キリスト教学校のネットワークの強さを改めて感じ、10年後、20年後の大学を創る職員として、建学の精神に立ち返り学んでいく新たなスタート地点を与えられた、充実した２日間でした。

本学での研修開催にあたり、森先生はじめご尽力いただいた皆様に心より感謝いたします。

（入学センター職員）

開会礼拝後　ソールチャペルにて

神戸女学院家庭会報告

個人情報保護のため、
一部削除しています。

春季公開講座報告

2016年度の春季の公開講座は、6月4日、6月11日、6月18日、及び7月23日の特別講座を加えて、「国境を越えて」というテーマで計4回開催いたしました。

第1回（6月4日）は、「国際経済とボーダレス経済」と題しまして、本学文学部英文学科のFukushima Marcelo准教授に、経済や社会の発展における「国際貿易」の存在について、具体的事例や歴史を踏まえてご講演いただきました。

第2回（6月11日）は、「音楽は世界をつなぐ架け橋」と題しまして、第Ⅰ部は、本学音楽学部音楽学科の佐々由佳里教授に、モーツァルトの生誕地であるザルツブルクの魅力や交流の取組みについてご講演をいただきました。第Ⅱ部では、佐々由佳里教授とドイツ・ザールラント州立管弦楽団チェロ奏者のアドリアン・ヤンケ氏によるデュオコンサートが行われました。

第3回（6月18日）は、「インド体験学習と大学生の国際交流」と題しまして、本学文学部総合文化学科の北川将之准教授に、本学総合文化学科におけるインドの協定校St. Joseph's College of Commerceの学生との国際交流の取組みについてご講演いただきました。

特別講座（7月23日）は、「戦争に負けるということ」と題しまして、本学名誉教授の内田樹氏に、日本の根底にある問題を見据えながらイギリス・フランス・ドイツ・イタリアと比較した日本の戦争の総括についてご講演いただきました。

これまで、長年に渡り開催してまいりました公開講座ですが、近年、本学の教育研究成果を社会へ還元する場としては、大学研究所主催講演会、女性学インスティチュート主催講演会、金曜公開プログラム、各学部主催の講演会やコンサート等多様なプログラムを開催していることから、春季秋季の公開講座は、今回をもって一区切りとさせていただくこととなりました。

これまでご来場くださった皆様、ご講演、ご演奏くださった先生方、スタッフの皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（生涯教育委員会）

2016年度　愛校バザー会計報告

個人情報保護のため、
一部削除しています。

学院リトリート報告

夏の盛りの中、今年も学院リトリートを７月22日(金)に行うことができました。

昨年に引き続き、神戸女学院と関係の深い教会との歴史的なつながりについて学び、本学院の建学の精神とキリスト教の特徴を考えるひと時となりました。講師に甲東教会牧師であり昨年まで本学院理事を務めてくださいました西澤他喜衛先生をお招きし「岡田山移転後の神戸女学院と甲東教会～第５代デフォレスト院長の祈りと働きを中心として～」と題してご講演いただきました。御自身も本学卒業生と関わりの深い先生ですが、牧会をしておられる甲東教会の礼拝には多くの卒業生が出席しています。甲東教会と神戸女学院とのつながり・歴史を顧みると、キリスト教という中心となる軸にそって、デフォレスト先生（第５代院長）や畠中博先生（第６代院長）という偉大な先人たちの働きがよく見えます。しかしその周辺には院長に賛同し、学校の発展に尽力した人々の姿が多数あり、多くの教職員、卒業生、また近隣の方々が神戸女学院と共に歩み、支えてくださったことがわかります。最後に先生は、建学の精神「愛神愛隣」は学校で完結せず、各教会へ導かれ共に歩み、そこでの歩みにおいて完遂されるのではないでしょうか、とお話しくださいました。

日　時：2016年７月22日(金)　14:00-16:00
場　所：H301教室
参加者：121名
講　演：西澤　他喜衛 氏（甲東教会牧師）
開会礼拝：飯　　謙
全体司会：中野　敬一

（チャプレン室）

2016年度　宗教強調週間

プログラム

〈11月７日～11月11日〉

11月７日（月）
早天祈祷会　　文学部 総合文化学科　３年生
中高部礼拝
「他者に注意を払う―どのように？」
学院チャプレン　飯　　謙
チャペルアワー
「他者に注意を払う―立ち位置の逆転」
飯　　謙

11月８日（火）
早天祈祷会　　高等学部　３年生
中高部礼拝
「いのちの御言葉に励まされて」
宮城学院学院長　嶋田　順好
チャペルアワー
「本当の自分を見出すところ」　嶋田　順好
全教職員礼拝
「愛の眼差しを注ぎつつ」　嶋田　順好

11月９日（水）
早天祈祷会　　文学部 総合文化学科　３年生
中高部礼拝
「始める一歩が道を拓く」
三浦綾子氏初代秘書　宮嶋　裕子
チャペルアワー
「始める一歩が道を拓く」　宮嶋　裕子
中高部 PTA のための宗教講話
「ワクワク・ドキドキ娘達と過ごした日々
―三浦綾子さんから学んだ子育ての力―」
宮嶋　裕子
学生寮　夕拝
「何を大切に生きるか」
頌栄短期大学　専任講師　森田　喜基

11月10日（木）
早天祈祷会　　高等学部　１年生
中高部礼拝
「日本初にして唯一のホームレスのホスピスを
作ったクリスチャンの信仰行路」
特定非営利活動法人きぼうのいえ
施設長・理事長　山本　雅基
チャペルアワー
「日本初にして唯一のホームレスのホスピスを
作ったクリスチャンの信仰行路」
特定非営利活動法人きぼうのいえ
施設長・理事長　山本　雅基
同窓生のための宗教講話
「日本初にして唯一のホームレスのホスピスを
作ったクリスチャンの信仰行路」
特定非営利活動法人きぼうのいえ
施設長・理事長　山本　雅基

11月11日（金）
早天祈祷会　　文学部 総合文化学科　４年生
中高部礼拝　音楽礼拝
「レーガー（Max・Reger 1873-1916）没後100年」
中高部生徒・喜多　牧子
学院オルガニスト　片桐　聖子
アッセンブリーアワー「宗教音楽の会」
J. S. バッハ　　主よ人の望みの喜びを
W. A. モーツァルト　アヴェヴェルムコルプス
サン=サーンス　　死の舞踏
音楽研究科１年

＜大学チャペルアワー＞

今年度は宗教強調週間講師として、宮城学院学院長であり、2015年より宮城学院中学校・高等学校校長を兼務されておられる嶋田順好氏。作家の三浦綾子氏の初代秘書を務め、現在三浦綾子読書会講師として全国で講演活動をされている宮嶋裕子氏。東京の山谷地区でホームレスを看取るホスピス「特定非営利活動法人　きぼういえ」を開設し、現在施設長・理事長を務めておられる山本雅基氏。以上三名の方々を講師としてお迎えしました。

８日（火）は嶋田順好先生が「本当の自分を見出すところ」と題してお話しくださいました。嶋田先生は聖書の徴税人ザアカイの話（ルカ 19:1-10）を通して自身ですら気づかない渇望、熱意をも、神は見いだしそれを満たす出会いを用意してくださる。主イエスとの交わりの愛によって、ザアカイは自分の裸の姿を見つめ、本当の自分を見出しました。そして、かれは孤独という最大の病を癒されました。聖書には多くの出会いが書かれております。皆さんもそこから主イエスと出会い、本当の自分を見出して欲しい、そのとき皆さんに真実の道が拓かれます、とお話し下さいました。

9日(水)は宮嶋裕子氏が「始める一歩が道を拓く」と題してお話しくださいました。三浦綾子氏は17歳で小学校教員となり、7年間国家が推し進める軍国教育を信奉し、子どもたちに指導してきました。敗戦後、価値観が180度変わる中、自分の過ちに気づき、1946年に退職。信じてきたものが屑同然に変わる中、ご自身も体調を崩され入院されました。絶望と自棄の思いの中、病院で再会した幼馴染の信仰に導かれ、1952年に洗礼を受け、多くの作品を執筆されました。三浦氏は絶望の底から光を求め、一歩踏み出すことによって、彼女の道が拓かれました。皆さんもそれぞれに悩みを持ち、絶望に悩まされることもあるかもしれません。そのような時にも、必ず救いとなる導きや出会いは用意されています。ただ一歩、自分から踏み出すことによって道は拓かれていくのです。どうか勇気をもって言葉を発し、一歩前に歩んで行ってください、とお話しくださいました。

10日(木)は山本雅基氏が「日本初にして唯一のホームレスのホスピスを作ったクリスチャンの信仰行路」と題してお話しくださいました。ホスピスに居られるホームレスの多くは、1945年の東京大空襲によって孤児となり、帰るべきところがありません。憐憫ではなく、当たり前の気持ちで始めた施設は多くの人によって支えられ、大変さはありますが働く者も入居する者もそれぞれの気持ちで生と死を見つめています。イエス様は何の実りのない人生をより祝福されると言われます。私たちにできることはただ、「イエス・キリストがおられる」という事実によって神と対話することから自分の道を見つめ、生き抜く事が大切だと思うと語られました。最後に「遠くへ行きたい」を皆で拝聴し、ホスピスの方々へと思いを馳せて黙祷を献げました。

8日(火)の全教職員礼拝では、嶋田順好先生より励ましのメッセージをいただきました。続けて永年在職者表彰式が行われ、長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひと時を持つことができました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若き姉妹の証を聞くことができました。共に祈るひと時を神戸女学院に連なる者で守ることができ、とても嬉しく思います。

遠方からお越しくださり、一日に何度も講演してくださった講師の先生方に深く感謝申し上げます。

(チャプレン室)

＜中高部礼拝＞

1日目は、神戸女学院の学院チャプレンであられる、飯謙牧師に「他者に注意を払う―どのように？」と題して奨励をいただきました。一人ひとりが目の前の他者に対して、信頼を置き、尊重しあいながら生きていくことの大切さをお話しくださいました。今年度の年間標語にもある、他者とともに生きていくこと、築いていくべき他者との関係について、改めて向き合い、考えるひと時となりました。

2日目は、宮城学院学院長、中学校、高等学校校長、嶋田順好氏にお越しいただき、「いのりの御言葉に励まされて」と題してお話しくださいました。伝道師、牧師として、活躍されていた先生の聖書に対する姿勢に心を動かされました。ただ一人、社会から疎外されて生きていた人にも癒しと救いをお与えになったイエスと、それに応答的に生きる人間の在り方について、思いを巡らせました。

3日目は作家・三浦綾子氏の初代秘書である宮嶋裕子氏にお越しいただき、「始める一歩が道を拓く」と題してお話をしていただきました。神戸女学院での奨励を楽しみにされていたようで、三浦綾子氏の作家になるまでの生涯を話していただきました。三浦綾子氏は長い間病気であられたのに作家として成功されたと聞いて、恵まれた環境にいる私たちが自分たちの今と未来を深く考えるひと時になりました。

4日目は山本雅基氏に「日本初にして唯一のホームレスのホスピスを作ったクリスチャンの信仰行路」と題してお話していただきました。日本の高度経済成長を支えた身寄りのない高齢者がいて、その方々のおかげで私たちは豊かに生きていると気づかされ、今自分たちが何をすべきか考えさせられました。誰かを救うために奮闘する人々の音声を聞いたり、マザーテレサの祈りとともに皆で黙祷したりと、とても有意義な時間となりました。

5日目はハンドベルやオルガンの演奏、Sコーラス部による合唱、喜多牧子先生による独唱に耳を傾けました。聞く者の心に響く素晴らしいものばかりで、よき学びの場となりました。

また、早天祈祷会でのお話しや、礼拝中の中高部生徒による音楽奉仕、様々な方をお招きした放課後プログラムを通じて、1人1人がキリスト教に向き合う、良いきっかけになったことと思います。

(J宗教部　中学部　3年生)

KCCだより

［コーベ・カレッジ・コーポレーション（Kobe College Corporation）は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC はその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回執筆をしてくださったのは、現在、ネブラスカ大学メディカルセンターのエプリー癌研究所助教授として研究に携わる傍ら、KCC-JEE 理事をおつとめくださっている楢村真弓さんです。］

わたしの旅路

KCC-JEE 理事
楢村　真弓

この十余年、同窓会で久しぶりに会う神戸女学院中高時代の同級生の口から日本の進学・就職状況を聞くにつれ、少子化の時代に、わが母校の存在意義は何なのだろうと漠然と考えるようになりました。そのような折、約二年前に KCC-JEE からお声掛けをいただき理事を務めさせていただくことになりました。

わたし自身の経験を振り返ってみますと、高等学部を卒業後は医学部に進学し、４年の臨床経験の後に渡米。以来継続して大学・研究機関で生命医学の基礎研究に従事しています。現在のアメリカの基礎医学研究者は医学部以外の理工系出身者が大部分ですので、なぜ医学部出身なのにお医者さんを辞めたの？と聞かれることもありますが、自分の興味のあるもの、自分が楽しいと思えるものを追い続けたらこのようなところに行き着いたとしか言いようがありません。

さて、アメリカに暮らして二十数年になりますが、やはり中高六年間の経験がなければ、自分の人生は全く違ったものになっただろうと実感します。英語は言うまでもありませんが、特に米国生活の半分以上を中西部で過ごしているため、神戸女学院で学んだキリスト教精神と讃美歌は、地元コミュニティに参加するための大きな支えとなっています。大学研究職というのは地元との接点が限られているので、わたしにとって教会は非常に重要なコミュニティの窓口です。特にネブラスカに来てからは教会の聖歌隊をきっかけにパイプオルガンを習うようになり、今では地元の教会で奏楽奉仕をさせていただいているので、大学コミュニティの中では見えなかったアメリカ、ニューヨークやカリフォルニアとは全く違ったアメリカというものを知るようになりました。

このような行き当たりばったりの経験を重ねてきた同窓生として現役の学生さんたちに申し上げたいのは、親御さんや先生方は貴女の幸せのためと思っていろいろ進路を助言してくださるだろうけれど、貴女の人生を生きるのは貴女自身なのですよ、というごく当たり前のことです。時代によって流行りすたりのある上辺の見てくれではなく、目先の結果だけにとらわれず、本当に価値のあるものを選べるよう、確かな選択眼を養ってください。そしてそのために KCC-JEE がどのようなお手伝いをできるのか、ご一緒に考えていきたいと思います。

新任のことば

個人情報保護のため、
一部削除しています。

史料室の窓(41)

学院史の歴史

神戸女学院史料室　佐伯　裕加恵

神戸女学院は今年（2016年）創立141年を迎え、来る150周年に向けて新たな学院史を編纂すべく年史編纂委員会を発足させました。私立学校でありミッションスクールでもある神戸女学院は、創立時から国内外のさまざまな人々の祈りと支援に支えられて今日までの歩みを進めてきました。そのことは時々の教職員、同窓生、学生生徒、関係者一同が常に心に留めてきた事柄でもあります。このため学院では折に触れ、自らの歩みを振り返るようにしてきました。ユニークな記念日である創立者記念日もその一つといえるでしょう。また、行事のみならず記録を残しておくこと、つまり学院史を作ることも続けてきました。

最初に登場する「学院史」は同窓会誌（現・広報誌）『めぐみ』が創刊された時（1890年８月）、そこに掲載された２ページほどの「本校記事署」。15年の学院の歩みを同窓生が記しています。この後、20周年、25周年、40周年、50周年に学院史が書かれ、25年史と40年史の筆者は不明ですが、ここまでの執筆者は皆、同窓生です。同窓生の学校に寄せる思いの深さを感じます。そして25周年以降は刊行本となり、たとえ小品とはいえ一冊の本を書き上げられるだけの文章力や構成力は、おそらく在学中に培われたものであろうと考えると、学院の理想とするリベラルアーツ教育が息づいている思いがします。伝聞や実体験に基づいている部分については、真偽を確かめるすべがないことが残念ですが、当時を物語る資料として貴重なものといえます。

75周年に刊行された学院史は全文英文によるもので、アメリカの伝道会本部の資料をふんだんに用いた学究的な内容になっています。執筆者の宣教師は歴史家ではなかったため、出典がないなど、現在からみると学術的ではない部分もありますが、これ以降、神戸女学院の正史と呼べる学院史は研究史的なものとなっていきます。

80周年に刊行された学院史は75年史をベースにして、歴史家である教授が単独で執筆した意欲的な正史です。編年体はとらず、事項別に分析を加えたもので、ここにしかない記述などがあり、執筆者の歴史を見る目が伺えます。本のあとがきにこうあります。「…さらに多くの未見の史料が提供されるならば、ますます精細かつ確実な歴史を書くことができるのである。それにもまして重要なことは史料の解釈である。…解釈なき史料の配列は単なる年代記であって歴史書ということはできない。…しかし真実を伝えることはいうまでもなく歴史家の使命であり責任である。…」（『神戸女学院八十年史』1955年）

『神戸女学院百年史　総説』『同　各論』

90周年には小さな写真集（パンフレット）しかありませんでしたが、100周年には総説（通史）と各論（論文集）の２冊が刊行され、現在はこれが神戸女学院史の決定版といえます。総説は編年体の通史で、複数の執筆者が多くの資料を用いて各専門分野からの考察を加えてまとめられています。各論は神戸女学院の教育についてさまざまな視点から論じられている研究論文集となっています。その後刊行された125年史は、大部の100年史を読みやすくして、その後の25年分を加えた略史で、簡単に手に取ってみることのできる読み物を想定して作られました。

こうしてみてくると、先人たちの神戸女学院と神戸女学院の教育に込めた思いやその深さをしみじみ感じます。そして学院史が研究に値するものであるとの思いも強くします。しかしそれ以上に、記録を残すという作業が自分たちだけのためではなく、共に祈り、支援してくださっている人々に向けられたものであったことも強く感じられるのです。単なる記念品ではない年史であることは必要だと思いますが、学術的であることと共に、感謝を込めてこれまでのさまざまな人々の思いに応えられるような学院史が書き継がれていくことを願ってやみません。

＜留学報告＞

One Year in the United Kingdom

David McCULLOUGH

For the first time in many years I was able to spend an entire year in Northern Ireland, close to my home town, conducting research on local history and media production. Having lived in Japan for so long I had forgotten how nice the summers can be in the UK, and how dark and dreary the winters are. I missed Japanese baths and Japanese food. But I was able to enjoy the beautiful old buildings, the rich popular culture and the green landscapes that I have missed.

My research was mainly on the period of Irish history between 1968 and 1998 that is known as The Troubles. I was able to conduct interviews with a wide range of people to and do lots of reading of both secondary and primary source materials. I am very grateful to Kobe College for the opportunity to focus entirely on research for one year.

My family accompanied me to the UK and my two children, who were nine years old, attended a local school. They have been raised as Japanese speakers so it was interesting for me to see how they would cope with total immersion in the English language as they attended school and watched British television. They really enjoyed the time and learned lots of English. I hope that as many as possible of our students will also have the opportunity to study overseas.

（英文学科教授）

ステレンボッシュ大学への留学

金田　知子

私は、2015年９月から１年間、南アフリカ共和国（以下、南ア）ステレンボッシュ大学ソーシャルワーク学部に国外留学をしました。

ステレンボッシュは喜望峰で有名なケープタウンから約50km 東に位置する、南アで２番目に古い街です。街の中心にあるステレンボッシュ大学は、学生数約３万人を有する国立総合大学で、その起源は1685年に設置されたオランダ改革派教会の付属学校にまで遡るとされています。

留学中は、ほぼ毎日大学に通い、研究室で研究をしたり、講義に出席したり、時には学生たちとフィールドに出たり、非常に充実した日々を過ごすことができました。ソーシャルワーク学部では、毎朝10時になるとお茶の時間があり、学部の教職員皆が集まり、お茶や食事をとりながらおしゃべりをする習慣がありました。たった30分のお茶の時間なのですが、それが学部内での人間関係を実にリッチなものにし、私自身、ほぼ毎日そこに参加しているうちに、スタッフと良好で親密な関係を形成することができるようになりました。

南アにはウブントゥ（Ubuntu）という言葉があります。「私たちは他者を通してのみ人間として存在する」という意味で、別言すると「他者への思いやり」ということです。留学中、南アで出会った人々からウブントゥの精神を感じ、心動かされることが多かったように思います。この場を借りて、このような留学の機会をいただけたことに、心からお礼を申し上げます。

ステレンボッシュ大学ソーシャルワーク学部スタッフと筆者

人　事

慶　弔

記念賞

個人情報保護のため、一部削除しています。

栄　誉

永年在職者表彰

新刊紹介

河西秀哉(総合文化学科准教授)　著

『明仁天皇の戦後と日本』

洋泉社　2016年6月刊
191頁　1,026円（税込）

今夏、国民に公開された天皇の「お気持ち」の表明は、「象徴天皇とは何か」を問うきっかけとなった。GHQの敗戦処理の方針と、日本帝国の旧支配者層の思惑との奇妙な一致によって誕生した「象徴天皇」。だが、それについて一体どれほどの人が真剣に考えたことがあっただろうか。

本書は、現天皇の皇太子時代からの新聞や雑誌の記事を資料として使い、戦後日本で「象徴天皇」がいかに語られてきたかを追っている。そこで明らかにされるのは、政府やマスコミ、国民それぞれが都合よく「象徴天皇」を解釈してきた歴史である。メディアによる「民主的な」皇室というイメージの再生産は、戦前の天皇制の維持・温存を図ろうとする守旧派との奇妙な共犯関係をつくり出していった。同時に、皇太子が、自らが負う「象徴天皇」の役割を模索し、深化させ続け（ざるをえなかっ）た過程も浮き彫りにされる。

戦前の歴史や記憶との断絶によって、「象徴」という形で天皇制を維持し、戦前との連続性を無反省に担保させようとする「非当事者」たちと、天皇制と戦争という過去との連続性を強く意識しながら、戦後日本にふさわしい「象徴」としての天皇の役割を明確化させようとする明仁天皇。「象徴天皇制」に対する両者のちがいは、戦争という負の記憶との、「断絶」によって現在と過去とを更新していくのか、それとも「連続」のなかで現在と過去とを問い続けるのかという、あの戦争、歴史との向き合い方のちがいを照射するものとみえてくる。

明仁天皇は、戦没者慰霊の旅を続けている。それはあの戦争の傷を未だ癒せぬ人々に寄り添うための旅でもある。戦争はまだ終わっていない。「象徴」の意味を問い続ける天皇は、その実践によって、私たちにそう語りかけているのかもしれない。

（総合文化学科准教授　景山 佳代子）

その他の新刊一覧

河西秀哉（総合文化学科准教授）　著
『うたごえの戦後史』　（人文書院）

吾妻　壮（心理・行動科学科教授）　著
『精神分析における関係性理論―その源流と展開―』
（誠信書房）

立石浩一（英文学科教授）　訳
『クエンティン・トロリップ折り紙作品集』
（おりがみはうす）

和氣節子（英文学科教授）　他著
『POETICA　Vol. 85』　（丸善雄松堂）

石川康宏（総合文化学科教授）　他著
『マルクスの心を聴く旅』　（かもがわ出版社）

藏中さやか（総合文化学科教授）　他著
『新注和歌文学叢書21　頼政集新注　下』（青簡社）

横田恵子（総合文化学科教授）　他著
『オーストラリアの日本人―過去そして現在―』
（法律文化社）

奥野佐矢子（総合文化学科准教授）　他著
『やさしく学ぶ道徳教育―理論と方法―』
（ミネルヴァ書房）

建石　始（総合文化学科准教授）　他著
『データに基づく文法シラバス』　（くろしお出版）

建石　始（総合文化学科准教授）　他著
『ニーズを踏まえた語彙シラバス』（くろしお出版）

建石　始（総合文化学科准教授）　他著
『名詞類の文法』　（くろしお出版）

小林隆道（総合文化学科専任講師）　他著
『宋代史から考える』　（汲古書院）

吾妻　壮（心理・行動科学科教授）　他著
『臨床場面での自己開示と倫理
―関係精神分析の展開―』　（岩崎学術出版社）

國吉知子（心理・行動科学科教授）　他著
『トラウマセラピー・ケースブック
―症例にまなぶトラウマケア技法―』（星和書店）

高岡素子（環境・バイオサイエンス学科教授）　他著
『油脂のおいしさと科学』　（NTS）

川越栄子（共通英語教育研究センター教授）　他著
『総合医学英語テキスト Step 1』
（メジカルビュー社）

＜キャンパスお気に入りの場所＞

理事室からの女学院スタート？

「キャンパスお気に入りの場所」という学報原稿執筆依頼をいただき正直悩みました。さすがに国の重要文化財指定本学舎群、あらためてなるほど素晴らしく美しい…どこも非のつけようのないお気に入りの場所…。でも、お許しをいただき今回は少し趣をかえて「お気に入りの場所」が「私の想い入れの場所」ともなる部屋を紹介させていただきます。それは総務館２階の理事室です。

理事室は理事会、部長会、課長会そして各種委員会等の会議開催場所であり、また講堂での行事の際の控室ともなります。1995年の阪神淡路大震災による被災の際には理事長・院長指揮下のもとに学院の最前線対策本部ともなりました。

そのような多くの役割を担っています理事室ですが私の神戸女学院スタートの場所と言っても過言ではありません。それは私が神戸女学院に専任職員としてお世話になることとなった34年前、公募職員採用試験の会場（筆記試験場所、面接試験待機場所）として使用され、本学院にそれまで全くご縁もゆかりもなかった私が神戸女学院で初めて入室させていただいた部屋が理事室でした。昨今は、職員採用試験でほぼ例年理事室が使用されていますが、私（たち）は男性公募職員の第一期生と聞いております。

そして採用試験の翌４月初日には理事室で新任教職員就任式があり、理事長から就任の人事辞令が交付されます。これで名実ともに神戸女学院の教職員としてその第一歩を歩み始めます。

この理事室は私にとって神戸女学院の起点であり34年前の新鮮な自分自身をふっと想いかえすことのできる想い入れの場所となっています。

（内部監査室長）

理事室

図書館（本館）

研究所と女性学インスティチュート、どちらにも縁（ゆかり）がある図書館（本館）をご紹介します。

中庭から図書館ファサード（正面）の緩やかな階段をのぼり建物に入ると静寂な空間が広がります。時期は異なりますが、西の中庭側には研究所が、東の中庭側には女性学インスティチュートがありました。

研究所は、1954年４月に設置されました。写真は1960年代、図書館１階（現・史料室閲覧室）の研究所です。その後、デフォレスト記念館２階（D-201）を経て、1997年夏、ジュリア・ダッドレー記念館３階（JD-301）に移転、現在に至ります。ちなみに神戸女学院大学『論集』の創刊は1953年６月。研究所設置よりも前のことです（詳しくは、『神戸女学院百年史（総説）』、及び、神戸女学院大学機関リポジトリにて、『論集』の、畠中博先生の「創刊の辞」、山口光朔先生の「通巻100号を祝う」をご覧ください）。

女性学インスティチュートは、1985年４月、デフォレスト記念館３階に設置されました。1998年４月、図書館１階（現・セミナールーム）に移転した後、2005年４月、研究所に統合されました。

図書館２階の閲覧室の全面北向きの大窓は本を保護し夕方でも室内に十分に光を取り込むことができます。重厚な木の机の読書灯は配線を隠す工夫がされ、３階まで吹き抜けになった高い天井のアラベスク模様は疲れた目を休ませてくれます。３階のギャラリーから眼下には閲覧室。晴日には窓外に青空の中庭が眺められます。図書館本館閲覧室とギャラリーでは、美しい調和の中に身を置いて知的な散歩を楽しむ至福の時を過ごすことができるのです。

（研究所・女性学インスティチュート）

1960年代の研究所（図書館本館１階）

大学報告

料理研究部×自治会　食堂メニュー提供

学生自治会

去年から始まった「お料理研究部×自治会コラボ」の企画を今年はさらに大きくして行うことができました。

これは学生のみんなが食べ物からキレイになることを目標にしたもので、お料理研究部さんと学生自治会がコラボして学生に食育を呼び掛ける企画です。

去年は「夏バテ防止メニュー」でしたが、今年はテーマを「腸活習慣」に設定し、お料理研究部さんと高岡先生にメニューの考案、試作を行っていただき、それをアッセンブリアワーの時間に講堂で発表していただきました。

今年はさらにそのメニューから

・塩麹とヨーグルトを使ったタンドリーチキン
・トマト納豆
・いちご寒天

の３点を食堂で提供しようと提案してくださり、期間限定メニューとして販売することになりました。これらのどれもが腸を活発にする働きを持っているとのことです。

これらのメニューの売れ行きは好調で、中には売り切れるものも出てくるくらいでした。

この機会に、食事の大切さを知り、それによって健康になる学生が増えることを期待しています。

また、この期間だけでなく毎日の生活で腸活を意識した食生活を送り、身体の中からも美しくなるように心がけようと思う学生が多くなることを願っています。

宣伝用看板

学生と企業による地域活性化の取り組み
「にしのみにゃ部」に参加して

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科　３年生

今年の６月から、西宮市内の大学に通う学生として「にしのみにゃ部」に加わり、活動を行いました。「にしのみにゃ部」とは、株式会社フェリシモが市内の大学生と企業とのコーディネーター役となり、西宮市の活性化に加え、猫と人とが幸せに暮らせる社会づくりを目標にした活動のことです。

私は、副専攻「地域創りリーダー養成プログラム」の授業で、学生が企業とともに地域活性化を進める「産学協働」という言葉を知り、地域と関わりたいと考えていたことがきっかけで参加を希望しました。「にしのみにゃ部」のセミナーで一番印象的だったことは、商品企画のアイデアをまとめる時に、企画案を壁に貼って、全員がその内容のいいと思ったところを付箋に書き出し貼り付けていったことです。他の部員の「猫の『ごめん寝（猫が両手を前に揃えて、顔を埋めたように寝ている姿)』の姿でソーダを作りたい」というアイデアに、私が「素直にあやまれソーダなー」と書いたところ、その言葉が商品名になりました。何気ない言葉が商品の要である名前になったので、とてもおもしろかったです。他にもフェリシモの社員にレクチャーを受けながら、商品のキャッチコピーや販売のための媒体作成などを行いました。そして、４か月ほどでアイデアが形となって、商品化され販売が始まりました。阪急西宮ガーデンズでも販売されており、直接お客様の元へ商品が届く姿をみて感動し、商品企画の楽しさを知りました。これからも地域活性化に役立つことをしていきたいと思います。

西宮市役所で行われた商品についての記者発表会

「子どものための七夕コンサート」
（子どものためのコンサート・シリーズ第44回）

「子どものための七夕コンサート～音にねがいをのせて」（子どものためのコンサート・シリーズ第44回）を７月２日（土）に講堂で開催しました（11時と15時の２回公演、来場者計605名）。

出演は「音楽によるアウトリーチ」履修生を中心とする音楽学部生11名（ピアノ５、声楽４、フルート、オーボエ、ヴィオラ、打楽器）で、「音楽を通して人と人をつなぐ架け橋になりたい」と願って企画を練りました。

開幕はエルガー作曲〈愛の挨拶〉（アンサンブル）とデュカス《魔法使いの弟子》（２台ピアノ）。続く楽器紹介では、フルートでモーツァルト〈きらきら星変奏曲〉を、ヴィオラでドヴォルザーク〈ユモレスク〉を披露しました。

ここで「うみは広いな、大きいな」の歌で身体を使ったリズム遊びを行い、「オットセイ」「イルカ」「波」の３つのリズムで掛け合いをして会場の子どもたちと盛り上がりました。

続いてドビュッシー〈喜びの島〉をピアノ独奏、レハール《メリー・ウィドー》より〈唇は語らずとも〉を二重唱、〈アメイジング・グレイス〉をソプラノとフルートとピアノで演奏しました。

最後に〈七夕コンサート・オリジナルメドレー〉（信田亜美編曲）を声楽、フルート、ヴィオラ、２台ピアノで演奏し、会場と一緒に〈たなばたさま〉を歌って締め括りました。

終演後には恒例の楽器体験コーナー（ヴァイオリン、フルート、ピアノ、トーンチャイム、ウィンドチャイム）が賑わいました。

（音楽学部アウトリーチ・センター長　津上 智実）

会場の子どもたちとリズム遊び

第10回心理相談室ウィーク　講演会報告
「『いじめ』について考える」

「心理相談室ウィーク」の期間中相談室スタッフによる講演会が行われており、2016年８月３日（水）13:00-15:00、「『いじめ』について考える」と題した講演をした。要旨は以下のようなものである。

1985年文部省が統計を取り始めたことにより、からかいから暴力まで「いじめ」という概念で一括りにされ、比較的軽微でグレーゾーンであった行為も「悪」というラベリングがされることになった。

日本では教室の中で被害者、加害者、観衆、傍観者という四層構造が固定化され、エスカレート、長期化する傾向がある。また、海外の研究者が不思議がるのは、被害者が転校することはあり得ないことで、加害者が自己責任により罰せられるという考えが世界標準のようである。

大人達は「いじめる」ことを「いじる」と言い換えて笑っているのに、子ども達のからかいに対しては「いじめ」として指導するというねじれた状況にあるが、大人達に自覚があるのだろうか。

「いじめ防止対策推進法」が2013年に議員立法で成立した。この法律では、軽微な「いじめ」から認知して指導していくために、被害感情に重きをおいた定義になっている。また、不登校が絡むと重大事態と定義されるので膨大な数の訴えが出てくる可能性がある。ただ、多少とも「いじめ」は減少傾向にあり、この法律を啓蒙に活かし、修正をしながら重大被害者を減らしていかなければならない。

（人間科学研究科教授　小林 哲郎）

講演中の小林（哲）教授

企業・業界研究ワークショップ

８月１日(月)～４日(木)、８日(月)の５日間で、３年生を対象にしたキャリアセンター主催の「企業・業界研究ワークショップ」が開催され、計20名の学生が参加しました。

このワークショップは、これまで馴染みのなかった企業や業界について、グループワークや企業訪問を通じて理解を深め、今後の進路選択や就職活動に生かしてもらうことを目的としています。

前半の３日間は企業や業界の仕組みについて、講師からのレクチャーとグループワークで理解し、４日目に企業を訪問しました。訪問先では営業現場や人事の方に会い、３日間で学んだことをもとに企業や業界の動向、働き方などについてヒアリングを行い、オフィス見学もさせていただきました。ちなみに今年は本学とつながりが深い４社にご協力いただくことができました。そして５日目にはヒアリングしたことをベースに訪問した企業についてプレゼンテーションを行いました。

このワークショップは今年で４回目の開催となります。例年参加した学生はここで学んだことを生かし、納得のいく就職活動を行うことができました。今回参加した学生も先輩に続いてくれることを期待します。

（キャリアセンター）

グループワーク

企業訪問

プレゼンテーション

Kobe College & Mozarteum Friendship Week 2016

10月31日から11月６日の１週間、協定校モーツァルテウム音楽大学からメゾ・ソプラノ歌手、エリーザベト・ヴィルケ教授と博士課程に在籍する学生、コレペティ奏者のアレクサンドラ・ヘルドルフが神戸女学院大学に滞在し、マスタークラス、ドイツ歌曲やオペラのワークショップ、高校生のための公開レッスン、コンサート等、数多くのプログラムが開催されました。

宮廷歌手の称号を持つ、ゼンパー歌劇場（ドレスデン）のオペラ歌手、ヴィルケ教授は、来日の２日前まで「魔笛」公演に出演していらっしゃいましたが、到着当日に開催された公開レッスンでも全く疲れを感じさせず、パワフルかつ豊かな表現力で学生達の持つ可能性を見事に引き出して行かれました。オペラ・ワークショップでは、何気なく座るその姿勢、手の動き、視線、すべてがその情景や空気を伝える凄さに圧倒される時間でした。

コレペティ奏者のアレクサンドラは、多数の声楽学生の伴奏を務めましたが、まるでオーケストラを聴いているかのように豊かな音色で歌をサポートし、日本歌曲「さくら横丁」でも見事な感性で日本の心を捉えていました。

金曜日公開プログラム「フレンドシップコンサート」ではヴィルケ教授がアレクサンドラと共に、深い情感に溢れたシューマンとブラームスの歌曲を演奏。引き続き、斉藤言子先生、松本薫平先生と華やかな三重唱が披露され、今年も実り豊かなフレンドシップウィークが幕を閉じました。

（音楽学科教授　佐々 由佳里）

Friendship Concert

地域創りリーダー養成プログラム（副専攻）報告
第8回　プレゼンテーション演習の発表会を終えて
「KSK★ここで素敵に輝いて　運命の授業に出逢いました。」

上記は本年度受講生が発表会のために考えたタイトルです。このタイトル通り、受講した学生たちはこの授業との運命的な出会いを感じ、自分たちがキラキラと輝いた空間に立っていることを実感したことが伝わります。

「地域創りリーダー養成プログラム」では、これまでの活動を報告するために発表会を開催します。今年度の発表会は8月のオープンキャンパス開催日に合わせ、学内の人だけではなく、高校生にも聞いてもらう機会を設けました。

プログラム最後の4年生の演習では吉田とも子先生からご指導を受けました。吉田先生からは、「この演習ではただプレゼンテーション技術だけを学ぶのではなく、活動の本質的な意義や自分たちの思いを再確認し、それを言語化、表現することが重要課題」であることが告げられ、学生たちは自分なりの答えを出すために苦闘しました。この学びを通し、学生たちは思考力、判断力、表現力という「情報編集力」という能力の重要性を実感できたことでしょう。今回の発表を聞いてくれた高校生たちも学生たちに憧れのまなざしを向けてくれていました。発表会のぎりぎりまで原稿をチェックする学生たちの真剣な横顔がとても愛おしく頼もしく見えた一日でした。

最後になりましたが、学生たちに愛のある指導をしてくださった吉田とも子先生、各班に寄り添いよき相談相手となってくださった人間科学部の先生方、ESD推進室のスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

（環境・バイオサイエンス学科教授　高岡 素子）

発表会当日の様子

＜留学生紹介＞

Welcome to Kobe College

2016年度、海外の協定校から新たに9名の留学生を本学に迎えました。

前期4月から7月にかけて、韓国・徳成女子大学より1名、英国・イーストアングリア大学から1名の合計2名が来学されました。

後期9月からは、韓国・徳成女子大学より2名、広東外語外貿大学から1名、米国・ロックフォード大学から1名の合計4名が総合文化学科に所属します。

また米国・ボーリンググリーン大学から1名が英文学科に所属します。

日本語の講義に加え、それぞれの専攻に応じ社会学、言語、Global Studiesや留学生を対象として英語で日本文化を学ぶIntroduction to Japanese Cultureと日本の現代事情を学ぶCurrent Issues in Japanの2科目（ともに本学学生も受講可能）などを受講しています。

また、同じく後期からの中国・広東外語外貿大学院の1名は本学大学院文学研究科で修士論文の完成を目指して学んでいます。

留学生の方々は、本学学生が留学生をサポートする“留学生バディ”制度を通じ、交流を深めています。皆様にも、留学生たちの本学での生活・勉強がより充実したものとなるよう、様々な場面でご協力いただければ幸いです。

（学生生活支援センター・国際交流センター）

＜受入れ留学生報告＞

『大切な思い出』

イースト・アングリア大学交換留学生

私はアメリカ生まれですが、日本で育てられ、イギリスのイースト・アングリア大学から留学に来ていました。イースト・アングリア大学では翻訳とメディアを勉強している３年生です。

神戸女学院大学への留学は１学期だけでした。長いような短いような留学で、あっという間に過ぎました。７月に終わって、８月にイギリスに戻りました。大学卒業に向かって頑張れるという嬉しさもありましたが、やり残したことが多く、やはり少し寂しいです。またいつか遊びに行きたいと思います。

実は、留学の話が出された時、最初はとても戸惑っていました。自分は一般的な留学生とは年齢も状況も大きく異なっていて、どうなるかとても不安でした。皆の中で浮いて、辛い思いをする事になるのではないかと、悩んでいました。そういう不安を持ったまま、神戸女学院大学に向かいました。

しかし、心配する必要はありませんでした。会う人だれもが私の状況を理解し、優しく受け入れてくれました。様々な素敵な教師に出会えて、本当に来てよかったと思うようになりました。思いがけない形で人助けをすることもあって、一生大切にしたいと思う友達もできました。神戸女学院のような素晴らしいキャンパスに住めるという貴重な体験をすることができて、私は最高に恵まれていると実感しています。

寮の先生たちにも国際交流センターの人たちにも色々と迷惑をかけたと思いますが、いつだって全力を尽くして対応してくれました。大変お世話になりました。心から神戸女学院の皆様に感謝しています。西宮で過ごした時間を忘れずに、これからも頑張っていきたいと思います。

忘れない思い出になった留学生活

徳成女子大学交換留学生

神戸女学院での１学期間の留学生活がもうすぐ終わります。時間がたつのがとても早いと感じました。日本へ来る時は、海外経験は初めてなので心配もありました。しかしそのような心配はすぐ消えました。IPC の職員の方々、一緒に留学生活を過ごしている留学生たち、神戸女学院の学生たち、先生の方々。色んな方々から、本当に多くの助けを受けました。

茶道、折り紙、生け花など、日本の伝統文化も体験し、本からは学べないことをたくさん学べました。それぞれの夢を持っている学生たちと、お互いの文化や夢について話しました。韓国語の授業のボランティアもして、韓国に興味がある友達とも仲良くなりました。夢のため、目標のため、一生懸命努力している神戸女学院の学生たち、そして留学生たちと出会い、刺激を受けました。

留学生活は私にとってはまるで夢のような時間でした。ここで付き合った友達と大阪、京都、神戸、奈良などの色んな所へ行き、初めての日本での生活を満喫しました。春には京都で着物を着て歩きながら、お寺や神社へ行き、祭りも楽しみました。初めて着物を着てウキウキして、写真もたくさん撮ってとても楽しかったです。これからももっと日本を知りたい、勉強したい、色んな人に会いたい、と思いました。

徳成女子大学の後輩たちにも、“迷わず留学に挑戦して！”と伝えたいです。この留学生活を通じて自分の視野を広げ、成長することができました。私は本当に前に進んでいるのか、などの将来に対する漠然とした不安が、私も努力すればできる、という自信に変わりました。大学生としてしかできない留学生活を、私がとても望んでいた日本で、そしてこの神戸女学院で過ごすことができて、本当によかったです。４ヶ月間の留学生活は一生忘れられない思い出になるでしょう。

＜派遣留学報告＞

ワイオミング大学

ワイオミング大学派遣留学

文学部 英文学科　4年生

ワイオミング州は標高が2,194mあり、町から街への道では地平線が見えるくらい何もありません。滞在したララミーにはスーパーや映画館、スケートリンクや寿司屋等がありますが、人口は少なく、私が生まれ育った神戸とは環境がかなり違います。アメリカ人のみならず、何十ケ国から来た留学生と交流できるワイオミング大学で過ごしていると、考え方は人それぞれだと思うことが多々ありました。例えば、帽子を被るということは、日本では無礼な事だと思われがちですが、アメリカの友人は気を散らさない為に被っていると言っていました。また、アメリカではキリスト教徒の方が信仰深いことを理由に人を褒めているのを度々耳にしました。宗教や政治の話は日本では避けるべき話題になりがちですが、アメリカでは自由に討論しているので、意見を言えないと恥ずかしい思いをします。普段考えないことを考える機会が増えたのも、アメリカへ留学して良かったと思う事です。派遣留学を行った結果、TOEIC等の点数で評価できる部分も伸びましたが、数字では表せない内面的な部分も成長しました。

この留学は、私一人では決して成し遂げられませんでした。友人、先生方、家族、多くの人に助けられ、はじめて成し遂げることができたのだと思います。また、このような機会を与えてくださった神戸女学院大学・ワイオミング大学の方々に、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

留学修了証書授与

チャタム大学

チャタム大学派遣留学

文学部 英文学科　4年生

チャタム大学はアメリカのピッツバーグという都市にある大学です。学生数もそこまで多くはなく、とてもアットホームなのですぐに多くの友人を作ることができます。派遣留学生として現地の学生と同じ授業を受けるのですが、授業自体も少人数制の授業が多いので、クラスメートや教授とのコミュニケーションの機会がたくさんあり、クラス全体で仲良くなる授業も多くありました。アメリカの大学生はやはり勉強量が多く、英語ネイティブではない私は苦労することも多々ありましたが、ルームメイトやクラスメートなどに助けられ、レポートやテストなどを乗り越えていました。

チャタム大学はピッツバーグの中心部のすぐ近くに位置しており、徒歩圏内にスーパーやホームセンターがあります。また、ピッツバーグには大きなショッピングモールや観光名所、スティーラーズやペンギンズなどのスポーツチームの拠点があり、休日になると友人と様々な場所を訪れていました。アメリカは車がないと生活のしにくい国ですが、ピッツバーグ市内には路線バスが通っており、大体の場所はこのバスを使用すると訪れることができます。学生は学生証を提示すると無料でこの路線バスに乗ることができるので、気軽に様々な場所へ出かけることができます。ピッツバーグの町も、チャタム大学も、とても楽しくかけがえのない経験をたくさんすることができました。ぜひ皆さんも勇気を出して留学に挑戦してほしいです。

チャタム大学学内

ボーリンググリーン大学

派遣留学を終えて

文学部 英文学科　4年生

ボーリンググリーン大学への約10カ月間の留学生活は私にとってかけがえのない大切な経験となりました。大学のキャンパスを初めて歩いたとき、建物の大きさや広大な敷地に圧倒されたのを今でも覚えています。「自分はこれからここで勉強するんだ」と期待に胸を膨らませて秋学期が始まりました。自分の期待とは裏腹に最初の1カ月は授業の内容が理解できない焦りと、自分だけが取り残されるという孤独感に押しつぶされそうになりました。私はボーリンググリーン大学で心理学を専攻していましたが、今まで心理学を学んだことがなかった私にとっては大きなチャレンジでした。しかしたくさんの人に支えられ学業はもちろんいろいろな新しいことに挑戦することができました。

今回の留学を通して私は英語力だけでなくアメリカの文化やいろいろな人のものの考え方、日本との違いなど様々なことを学び、経験しました。文化の違いや言葉の壁に悩まされることもありましたが、友達や先生、そして日本で私をずっと応援してくれていた家族、たくさんの人たちに助けられ一つ一つ乗り越えることができました。留学を終えて、私は人間として大きく成長できたと感じています。さらに、残り少ない大学生活の学びの糧となり、今後の目標を明確にすることができました。次の目標に向かって留学生活で培ったことを活かし、これからさらに大きな舞台へ進んでいこうと思います。

寮の友達との写真

イーストアングリア大学

2015-2016 英国派遣留学報告

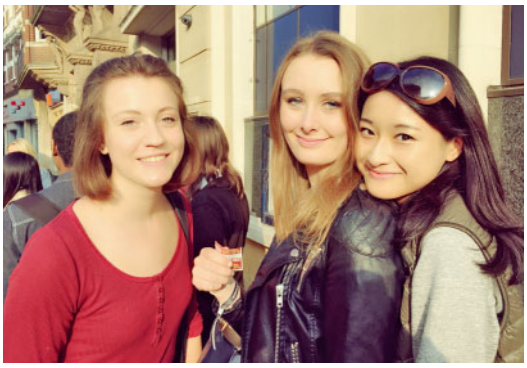
文学部 英文学科　3年生

2015年9月から2016年6月まで、イギリスのNorwichにあるイーストアングリア大学（UEA）に派遣留学させていただきました。そこで勉強したこと、たくさんの経験を通じて学んだことについて、報告させていただきます。

留学先では、自身の興味のある分野を学びたいと思い、メディア学科から映画史の授業を選択しました。また、留学前に神戸女学院で勉強していた、「日本という国や文化をどう世界に表現するべきか」といった内容を、海外の大学でぜひ挑戦したいと思い、日本語専攻のイギリス人学生向けのコースに参加しました。授業外活動では、日本文化サークルJapan Societyに所属し、日本人留学生代表として、日本の魅力を世界に発信しました。

大学の寮では、イギリス人のフラットメイトたちに囲まれて暮らしました。イベントや、誰かの誕生日がくるたびに、キッチンでパーティーをしました。ブリティッシュの大学生の会話を聞き、流行りの文化を学び、いつのまにかそんな環境の中にいることが、心地よく楽しくて仕方ないと思うようになっていました。

大きな休暇（クリスマス休みとイースター休み）を使って、友人達と旅行に出かけたりもしました。イギリスの端から端まで一人旅もしました。イギリス文化や、地元の人々との交流を楽しむ機会をたくさんいただき、より留学生活を楽しく実りあるものにすることができました。新しい出会いや発見を通して経験したことはすべて、私自身の成長に繋がったと確信しています。



週末はイギリス人の友達とシティにショッピング

広東外語外貿大学

魅力に溢れた国、中国

文学部 総合文化学科　4年生

私は約11か月間、中国の広東外語外貿大学に留学をしました。1年生の頃から中国留学を目標にしていたので、行けて本当によかったです。留学中はもちろん楽しいことばかりではなく、失敗したり悔しい思いもしました。しかし、今では全てが大切な思い出になっています。

私が過ごした広州市は飲茶の本場なので、飲茶はもちろん料理がとても美味しかったです。近代的な街並みの中で歴史的な建物を観賞することができるという、まさに昔と今、そして未来を感じることができる場所です。そして広東外語外貿大学は外国語大学なので、他の国の留学生たちと一緒に授業を受けました。私は中国語と広東語の授業などを取り、太極拳や切り絵など、中国文化を体験できるアクティビティーもあったのでとても充実していました。一番印象的だった出来事は、スピーチ大会です。理由は、留学生活の集大成だと思い挑んだ本番で、うまく話すことができず悔しい思いをしたからです。努力をしても報われない時もある、でも悔しい経験というのは原動力に変えることができると思いました。

中国と聞くと、領土問題や反日など、あまり良いイメージを持っていないかもしれません。私も以前はそうでしたが、実際に中国で過ごすと、今まで知らなかった中国の魅力を沢山知ることができました。大好きな場所で過ごした11か月の思い出と経験は、私の宝物です。

アジア文化祭で中国人の友人たちとダンス！

徳成女子大学

徳成女子大学で得たもの

文学部 総合文化学科　3年生

私は、派遣留学生として韓国ソウルにある徳成女子大学に4ヶ月間留学させていただきました。私が通っていた徳成女子大学は、ソウル中心部の様なビルの多い町並みではなく、山や自然の多い環境でした。私は、語学堂での韓国語の学習以外に大学の方で英語の授業と国語音声論という韓国語の成り立ちなどを、勿論すべて韓国で学ぶ授業を履修しました。

授業は勿論ですが、普段の生活では交換留学生の中で日本人が私1人だったため、生活が始まったばかりの時は、とても不安な毎日でした。ですが、寮での生活など友達と助け合いながらの暮らしをし、改めて友達の大切さを実感しました。日本人が1人だったということもあり、短い留学期間でしたが語学力は、留学前に比べ伸びたと実感しています。旅行では何度も行ったことのある韓国だったのですが、留学を通して旅行では知ることのできない文化や暮らしをすることができました。そして、何よりも日本で勉強するのではなく外国語をその現地で実際に生活をしながら学べることの大切さを実感しました。

留学で得た学びは無駄にせず、新たな学びに活かしたいです。

授業最終日に語学堂の友達と撮ったもの

ロックフォード大学

チャレンジすること

文学部 英文学科　4年生

Hello! 私は米国ロックフォード大学に留学させていただきました。現地では私の専攻であった国際関係学だけではなく、解剖学や数学、スキューバダイビング、ギリシャ神話、ビジネス、経済学、演劇など幅広い授業を履修しました。

印象的だったのが解剖学で実際にブタの解剖をはじめいろんな解剖を自分たちでしたことです。また、ビジネスの授業では実際に各学生が架空の会社を作り、その会社を設立する為に実際に必要になる法的書類の記入から会社を運営させる為の必要なコスト、収益や資産などを自分たちで一から考えて発表するというプロジェクトをはじめ社会に出て役立つ実践的なものを学びました。自分の専攻でなくても学ぶことは本格的で、どんな人とでも話せる自分の引き出しを増やすことができたと思います。

留学を通して感じたことは、人生は一度きりで、その過ぎ去った瞬間に戻ることはないので、あの時やっておけば良かったと後々後悔しないように、したいと思ったことはどんどんチャレンジしてみることが大切だと感じました。そこで培った経験は必ず自分の強みとなり、生涯のどこかで役に立つ時がくると思います。このような素晴らしいロックフォード大学という存在に巡り会う機会を与えてくださった神戸女学院、そして留学をサポートしてくださった多くの皆様に深く感謝し、今度は自分がまた他の誰かを支えていける存在となれるようにこれからも成長していきたいと思います。

ロックフォード大学卒業式にて

＜語学研修報告＞

ヨーク大学（カナダ）

カナダでのステップアップ

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科　2年生

語学研修は今回が初めてで、不安と期待の中カナダへ渡航しました。13時間という長い飛行時間と、13時間の時差、気候の違い、そして言語の違いになれるのに少し時間がかかりました。１週目は神戸女学院だけのクラスで、まずは英語を耳に慣らすことから始まり、ヨーク大学のコミュニティーリーダーとのキャンパスイベントや、ダウンタウンに訪れたりしました。バス、地下鉄の乗り方や、行先への道順などとにかく現地の人に聞いて、知識を増やし、とにかく英語に慣れる、英語という壁を壊すために現地にたくさん触れました。１週目は挑戦の週となりました。

２週目には他大学も合流し、混合のクラスとなりました。私のクラスはプレゼンの多いクラスで、３週間で大小含め６つほどのプレゼンを行いました。一人でやることもペアでやることもありました。図書館に夜遅くまで残り PowerPoint を作ったり、ヨーク大学の学生やスタッフなどともたくさんコミュニケーションを取りました。すべては現地の人との関わり、カナダに対する知識、発音の改善、英語力のスキルアップが最終目標となるようなプレゼンでした。

学校以外にも多くのアクティビティがあり、このアクティビティにより休日、平日の午後もかなり充実したものとなりました。特にナイアガラの滝はアメリカとカナダの国境であるということもあり島国の日本では体験できない、国境を目の当たりにすることができ、ナイアガラの滝の壮大さには圧倒されました。

約１カ月の研修を終え、様々な経験をしました。

１カ月を通してやはり１番思うことは、英語がもっと話せたら、聞き取れたらどれほど違っていたかということです。

書く英語ももちろん大切ですが、コミュニケーションとるにあたって最も大事なことは、話せること、聞き取れることだと思います。日本での生活ではなかなか話す英語が日常的ではないので毎日が貴重な体験でした。こんなに充実した１カ月は二度と過ごすことができないと思うぐらい素晴らしい１カ月でした。この１カ月の経験は、一生忘れることのない最高の時間です。

コミュニティーリーダーたちとアフタースクールアクティビティ

フランシュコンテ大学

素敵な出会いに感謝

文学部 総合文化学科　2年生

私は以前、フェルメールのレースを編む女を鑑賞し衝撃を受けました。裕福なプロテスタントの女性が仕事に没頭している小さな絵画で絵の具に魔法が仕組まれているような作品でした。17世紀のヨーロッパ文化が花開いた時代の作品を目の当りにし、いつかはヨーロッパ文化に触れてみたいと強く思いを馳せるようになりました。大学でフランス文化の講義を通じて増々その思いが強くなり、今回の留学を決めました。クラスメイトはコソボ、リビア、エジプト、中国と様々な国籍でした。国同士の政治的な問題、宗教や文化の違いはありますが文化風習の違うこの地に共に集う仲間となりました。1ケ月の研修を通じ皆で様々な困難な問題を一緒に解決していきました。心と心の出逢い、まさに「我逢人」です。世界は本当にあたたかいと身に染みて肌で感じ取ることができました。週末にパリへ行きルーブル美術館やベルサイユ宮殿等を楽しみました。歴史ある街並みや芸術を心と身体で体感しました。17世紀ヨーロッパ文化が黄金の時代と呼ばれていた頃、日本は江戸時代初期、都京都では二条城など様々な文化が花開いた時代です。両文化は大切に守られ私たちに感動を与え続けています。この研修を通しヨーロッパ文化の素晴らしさを実感したと同時に日本の素晴らしさを見直すこともできました。最後に国際交流センター、日本旅行、CLA関係者の方々に心から感謝しております。ありがとうございました。

CLAでの友人と

アーバイン校

UCI語学研修

文学部 総合文化学科　4年生

私は、新しい経験をたくさんすることで、自分の視野を広げたい、という気持ちから、語学研修に参加しました。今回の研修で学んだことの一つは、話すことの大切さです。UCIのクラスでは、人数が20人に満たず、全員でのディスカッションが可能で、自分の意見や経験を話すことが多々求められました。スピーチやプレゼンテーションも、多く課されました。それは私にとても良い影響を与えました。

話す準備をする際に考えが整理でき、話している間に新しい考えが見えてきました。いつも話すつもりで授業に出ていると、より真剣に考えながら話題に参加できました。また、話す力は練習を重ねれば身につくとわかりました。はじめは話すことをためらっていましたが、自信を持って発言するクラスメートたちを見て、次第に自分も話したいと思うようになりました。勇気を持って何度も挑戦するうちに、スムーズに話せるようになりました。身につけた話す力は今後のあらゆる活動に、大いに役立つと思います。発言しようとする意欲が持てたことには、英語に少し自信がついたことも影響していました。UCIの先生方は、いつも私たちのいいところを見つけて褒めてくださいましたので、簡単に自信を持つことができました。今回の研修を通して学んだと、1ヶ月かけて得た自信や意欲を、これからも失うことなく更に発展させることができるように、努力していきたいと思っています。

アーバイン校内の様子

西オーストラリア大学

西オーストラリア大学夏期語学研修で得たもの

文学部 英文学科　3年生

今回の語学研修は私にとって初めての海外で出発前は不安でいっぱいでした。が、実際に生活を始めてみるとその不安はすぐになくなり、4週間という短い滞在期間に多くのものを得ることができました。

ホストファミリーとの生活は最初の1週間は本当に大変でした。慣れない環境、全く異なる文化、言葉の壁。言いたいことが言えなくて、毎日疲れ切って、学校で聞こえてくる日本語に安心感を覚えました。ですがたとえ拙い英語でも自分から話しかけるように心がけて過ごしているといつの間にかお父さんやお母さんとの会話を楽しめるようになっていました。

学校でも様々な国籍の友達ができ、英語で多くのことを話しました。時には説明や表現が難しい内容もありましたが頑張って「伝える」努力をしていると思っている以上にしっかりと伝わり英語で会話する楽しさを感じていきました。

放課後や休日は友達と多くの場所を訪れました。日本とは全く異なるオーストラリアの文化や歴史、自然を肌で感じることができ、友達との思い出もたくさん作ることができました。この時間は観光と勉強を兼ねた貴重な時間でありました。

オーストラリアでは「自分から行動することの大切さ」、「英語を使う大変さと楽しさ」、「多くの人との縁」など書ききれない程多くのことを得ることができました。不安だらけの語学研修でしたが、今は参加して良かったと心から思います。今回の縁をこれからも大切にしていきます。

最終日にホストファミリーと撮ったものです。素敵なお父さんとお母さんでした。

音楽学部夏期講習会報告

2016年音楽学部夏期講習会は、7月29日(金)～8月1日(月)の日程で開催いたしました。本学の音楽教育への取組を少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験してくださることを目的として今年の講習会には187名が参集し、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を直接感じ取っていただく機会になったことと思います。

講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエィション専攻については、聴音、楽典のテスト及び授業と、各専攻教員による個人実技レッスンを実施しました。また辰村 千花先生(ピアノ)、周防 彩子先生(声楽)、蜷川 千佳先生(ピアノ伴奏)、寺澤 彩先生(ハープ)、宗本 舞先生(フルート)のミニコンサート、さらに、大浦 春菜先生(ピアノ)、西田 真由子先生(声楽)、小幡 麻紀先生(ピアノ伴奏)のミニコンサートに耳を傾ける楽しいひと時となりました。

また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島﨑 徹教授の特別講座、さらに舞踊専攻生による「ショート・パフォーマンス」が披露されました。

(音楽学部事務長)

保護者懇談会報告

今年度の保護者懇談会は４回行われました。

まず１年生保護者対象の懇談会が、６月４日(土)家庭会大学部会総会に引き続き、本学院講堂で開催されました。出席者は82名。学生部長の挨拶と学生主事紹介、共通英語教育、就職状況・就職活動、留学に関する説明が共通英語教育研究センター教員および担当職員によって行われた後、個別懇談が実施されました。

学外会場は北陸地区・九州地区在住全学年保護者を対象に２都市を設け、北陸地区の懇談会は７月２日(土)金沢都ホテルにおいて開催されました。出席者は12組16名。また、九州地区の懇談会は７月23日(土)ホテル日航福岡で開催されました。出席者は30組40名。いずれも学生部長による開会祈祷・挨拶・講話、学長による学事現況報告、キャリアセンター課長による最近の就職状況の説明が行われ、昼食(懇談）をはさんで個別懇談が実施されました。

２年生保護者対象の懇談会は、10月29日(土)本学エミリー・ブラウン記念館で開催されました。出席者は62組70名。学生部長による開会祈祷・挨拶、学長による学事現況報告、本学専任カウンセラーによる講演が行われた後、各学科・各部署に分かれて個別懇談が実施されました。

保護者の皆様と各学科長、学生主事、教務課、キャリアセンター、国際交流センター、カウンセリングルーム、学生寮、学生生活支援センターの担当教職員が直接懇談し、質問、要望等をうかがう貴重な機会となりました。

（学生生活支援センター課長）

夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・事業体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験を行う機会を提供しています。

ひと口にインターンシッププログラムと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をするプログラムから、グループワークなどを通じ課題に取り組み、プレゼンテーションを行うプログラムなど、多種多様なプログラムがあります。学生は、自分の希望業界や体験したいプログラムに応じて、各種のインターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体、団体の皆様のお世話になりました。記して、心よりの感謝の意を表します（かっこ内は受け入れてくださった本学学生数)。

兵庫県庁（７名)、西宮市役所（３名)、加古川市役所（１名)、香川県庁（１名)、姫路経営者協会／神姫バス（１名)、姫路経営者協会／姫路シティ FM 21（１名)、和歌山県経営者協会／和歌山市役所（１名)、福井県経営者協会／鯖江市役所（１名)、福井県経営者協会／東横イン（１名)、堺・南大阪地域インターンシップ推進協議会／野村證券（１名)、関西環境管理技術センター（１名)、三井住友海上火災保険（７名)、大阪シティ信用金庫（１名)、尼崎信用金庫（３名)、姫路信用金庫（４名)、JTB 西日本（１名)、名鉄観光サービス（１名)、日本旅行（２名)、ホテルオークラ神戸（３名)、カース・キャリアセンター（１名)、鳥取県中小企業団体中央会／ひよこカンパニー（１名)、マツダ（１名)、P-DASH ／企業プロモーション型インターンシップ（１名）

KCC/KC インターンシッププログラム／Japan America Society of Chicago（１名)、Anderson Japanese Gardens（１名)、Daikin Applied Development Center（１名）

学生のインターンシップに対する関心は高く、５月と６月に各１回行われたインターンシップ・ガイダンスでは、合わせて480名の参加がありました。また、アメリカに学生を派遣する KCC/KC インターンシップの説明会、および派遣学生による報告会にも、合わせて45名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精力的な活動を励まし続けたいと考えています。

（キャリアセンター）

＜インターンシップ参加報告＞

KCC/KCインターンシップ

文学部 英文学科　3年生

アメリカのミネソタ州にある Daikin Applied Development Center（DADC）でのインターンシップは2016年度から始まり、私は神戸女学院大学からの1人目の実習生として一か月間研修を行いました。ダイキン工業は日本を代表する空調メーカーで、今では世界シェア1位を誇っています。そんな大企業の子会社である DADC で研修をできることに胸を弾ませ、たくさん吸収して帰ってこようという思いでした。

私が実際に行った業務は多岐にわたります。初日は専門用語飛び交うミーティングに参加。ビジネスの現場を肌で感じました。働く上で重要な企業理念は、直接トップの方にお話しをしていただきながら学びました。マーケティング部門に所属していらっしゃるスーパバイザーの元で教わっていたので、競業他社分析や製品比較、マーケットリサーチも学びました。業務用の空調機器を扱っている企業なので、英文学科の私にとっては日々教わることが未知の世界のこと。頭の中に情報が溢れパンクしそうにもなりました。しかし、社員の方々は分かりやすく丁寧に説明してくださり、私がたくさん質問しても嫌な顔一つせずに納得するまで答えてくださいました。最終日の前日はプレゼンの発表。プロである会社の方々に向けてのプレゼンは緊張しました。しかし、この経験によりどんな場面でも人前で発表することに臆せず挑戦できる自信がつきました。

少し背伸びして何かに挑戦することは成長するための近道です。これからもそんな経験をしていきます。

DADC オフィス外にあるパネルの前にて

インターシップ参加報告書

文学部 総合文化学科　3年生

私は、夏休み期間を利用して大阪シティ信用金庫の計8日間のインターンシップに参加しました。

今回のインターンシップでは、本社にて講義を4日間、実際に支店にて4日間の研修を行いました。信用金庫に関する概説、各部署による業務内容を講義形式で伺っていく中では、自身の金融業界に関する知識不足、就職活動に向けた今後の課題が顕著に現れました。

支店での研修では、お客様の目に触れる環境で、普段の生活や就職活動の中でも見る機会が中々無い窓口の裏側を知る機会を得ることができました。実際に現場で働く皆さんの雰囲気は勿論、お仕事の合間に業務内容についてじっくりとお話を伺えたことは一学生としてもとても感謝しています。

私はこのインターンシップを受けるにあたり、金融という側面から地域のお客様と繋がる仕事について考えました。信用金庫では、ただ金融機関として支店の窓口でお客様とやり取りをするだけではなく、地域密着型の金融機関ならではの地域のイベントへの支援活動等に企画・参加する機会もあることを初めて知りました。様々な地域のイベントや機会を通してお客様と間接的にも繋がることもできる点が、信用金庫の強い部分だと感じます。

今回のインターンシップで、自身にとって今後の就職活動を進めていく指針となる経験ができました。今後も金融業界以外でも様々なインターンシップに出向き、これからの就職活動に充分に備えていきたいと考えています。

2016年度秋季大学教授会研修会報告

2016年度秋季教授会研修会は「多様化する学生に対する適切な態勢」というテーマで、10月11日午前10時から午後４時にかけて HB-301で行われました。

本学で学んでいる学生たちは、学力や資質などにおいて見逃すことのできない差異を示すようになっているとお感じになっている教員も多いようです。多様化それ自体は、何か新たなものを生み出しうるので歓迎すべきことではありますが、日々の教育実践の中でどのように対応するか悩まされることもあるのではないでしょうか。とはいえ「愛神愛隣」を学院標語として掲げ、「Student first!」を打ち出した本学にとって、多様化する学生に対して個々の教員レベルでも大学組織のレベルでも適切な態勢を整えることは、大いにやりがいのあることではないでしょうか。

そこで、2016年度秋季教授会研修会では、成蹊大学文学部教授・臨床心理士の岩田淳子先生にご講演をお願いいたしました。岩田先生は、成蹊大学にて教育・研究に従事されると同時に、成蹊大学の学生相談室専門カウンセラーとして、ご活躍されています。

午前中には岩田先生が、「発達障がいのある学生への合理的配慮」についてお話しくださいました。それを踏まえた午後のグループ討議では活発に議論がなされつ、参加者全員で討議内容を共有する際には岩田先生からのコメントを頂戴しました。最後に能動的学修の観点を交え、会を振り返りました。

院長先生を含む教員77名、職員20名の合計97名が参加した研修会は大変盛況で、今後の本学の在り方にとって意義深いものとなりました。

末筆ながら、会の準備のために奔走してくださったカウンセリングルーム及び学長室（FD センター）の職員の方々に心より感謝いたします。

（FD センターディレクター）

大学クローバー賞表彰式

心配された雨も降らずに、例年より多くの来場者が中庭を埋め尽くすなか、大学祭のオープニングに先立ち、大学クローバー賞の表彰式が執り行われた。

大学クローバー賞は、神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、前年の９月から１年間で、顕著な活動もしくは、優秀な成績をおさめた団体・個人の栄誉を讃えるために毎年贈られる賞で、連絡協議会委員、学生自治会委員らの投票により選考される。

今年度は、コーラス部、学生 YMCA、ラクロス部、お料理研究部、書道部、Dance Lovers. の６団体が受賞した。それぞれの団体は、学内外で精力的に活動し数々の大会で優秀な成績をおさめていること、他大学との交流も盛んで社会的な貢献をしていること等が評価された。

飯学生部長から選考の経緯と受賞理由が説明され、斉藤学長から表彰状と賞金が授与された。続いて、各団体の代表が受賞の喜びと今後の抱負を笑顔で語った。

最後に、斉藤学長より各団体のさらなる活躍への期待と励ましの言葉をいただいた。今後も本学学生が課外活動に積極的に参加し、充実した大学生活を送ることができるよう祈念している。

（学生生活支援センター）

表彰されるラクロス部

2016年度「めぐみ会賞」

めぐみ会賞は公益社団法人神戸女学院めぐみ会が神戸女学院の立学の精神にふさわしい課外活動をしている学生・生徒の団体を表彰する賞です。15回目となる今回は、大学からのご推薦団体の中から学生YMCAと神戸女学院大学コーラス部を選ばせていただきました。

YMCAは東日本大震災復興支援や尼崎での学習支援のボランティア等を活発にしていること、また、コーラス部はPRAY FROM KOBE～明日につなげるコンサート～に参加し、阪神・淡路、東日本をはじめとする被災地へエールを送る活動をしていることが主な授賞理由です。

10月21日(金)岡田山祭のオープニングセレモニーで授与いたしました。「祭色兼美」というテーマにふさわしく、女学院生らしい明るさで神様からのめぐみに感謝しつつ美しく、ますます活発にご活動されることを願っております。

中高部のめぐみ会賞は、例年授与時期が年明けとなりますので、ここでは、2015年度の受賞団体のご報告をさせていただきます。

2015年度はJ自治会と修養会釜ケ崎訪問に授与いたしました。J自治会は、キャンパス見学会の際の生徒目線の学校案内とAED講習や防災への啓蒙活動を行なっていること、また、修養会は釜ヶ崎での炊き出しのお手伝いをしていることが受賞理由です。ますますのご活動を期待しております。

（公益社団法人神戸女学院めぐみ会　副会長）

大学祭にてめぐみ会副会長より授与

＜私の研究＞

私の研究

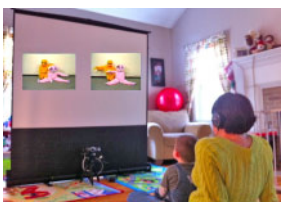
松尾　　歩

私が幼児の母語習得分野に初めて興味を持ったのは、アメリカの大学院在学時でした。それはFirst Language Acquisitionと呼ばれる分野です。神戸女学院大学の学部生の時にも言語学の導入コースで母語習得については何度か講義を受けたことがあったのですが、本格的に深く勉強を始めたのはアメリカの大学院が初めてでした。その時以来第一言語習得への興味は薄れることなく今に至ります。

第一言語習得の分野では、特にまだよちよち歩きもしないような月齢の子どもが我々の一般的な想定をはるかに超える言語能力を持っていることを発見すると、人間の能力の奥深さに魅力を感じます。子どもたちの外面と内面のギャップにはいつも驚かされ、また感動させられます。子どもとの言語調査の方法は数多くの種類があり、子どもたちはゲームをするような気分で、いつも楽しみながら参加してくれます。写真にあるようにパズルをさせながら「に格」や「を格」の発語を促すこともできます。今実施中の研究は子どもの目の動きを追ってどのように語や文を理解しているのかという調査（選好追視法）です。調査をするための道具（パズルや動画など）のデザインや内容は全て手作りで自分のリサーチクエスチョンの解明になるような刺激を作ることは、大変手間と時間がかかりますが、研究を成功に導くためには避けられないプロセスです。

人間が他の動物と区別される側面：「言葉を使う能力」について研究を行っていると未知のことが多く存在し、難しい場面に遭遇することも多々ありますが、色々な月齢の子どもたち、そして保護者、保育園、幼稚園や小学校の先生方と交流をしながら研究を進めることができるのは、人が大好きな私にとっては天職であると思って研究を続けています。そして、自分の母校でその大好きな研究について講義をすることができることにいつも感謝しています。学生たちに少しでも私の研究の面白さを分かってもらえたらこれ以上の幸せはありません。

（英文学科教授）



選好追視法のセットアップ

3歳の子どもがパズルタスクをしている様子

パズルの1ピース
「男の人が赤いくまさんに蜂蜜をあげる」

私の研究

辻井　淳

私のヴァイオリンを媒体とする研究は、二方向からアプローチしています。

一つ目は、80歳以上でも演奏可能な「奏法理論のデータ化」です。演奏はスポーツと共通する要素がありますが、短期決戦型ではなく持続可能な奏法の獲得が必須です。ヴァイオリンは動作が可視的で外側からも技術を獲得できますが、力の方向が絶えず変化するので、身体の内的な動きを理解する必要があります。技術面では、物理的な事柄をどのように扱うかということで問題は解決します。

奏法理論書は多数ありますが、訳文でわかりにくく、動作の説明は難解です。これらを、必要なトレーニングと共に分かりやすく説明し、東洋と西洋の相違を考慮し、老化しつつある自分の身体に訊ね、整理していくことです。

二つ目は「次世代に残すべきヴァイオリン小品集」の CD と楽譜作成です。楽譜の作成とは、楽譜が存在しないものを音源から楽譜に起こしていく作業です。古い音源は判別不可能な箇所もあり、同じ作曲家の他作品から音楽語法を読み解き楽譜にし、全体の構成を考慮しつつ音源を CD 化していきます。

演奏会プログラムの巨大化に歯止めが必要な時代になりました。経済基盤が弱体化し、商業主義音楽は過去の価値ある作品の再演の機会を奪い、一級品の小品の楽譜そのものが絶版となり、人々の耳に留まることがなくなっています。

1997年からスタートした小品の CD は、神戸女学院大学研究所の助成を受け、現在 CD19種類220曲余りで、残り80曲を目標とし、データ化することにより永遠に廃れることはなく、再演の機会が保証されます。

演奏時間が短く飽きない小品は、場所の制約が少ない上に経済状況の影響を受けにくく、大正から昭和初期に流行したヴァイオリン大衆芸能に結びつき、広く民衆に小品を紹介できる可能性があります。

真の意味で西洋文化に目が開かれて、権威にとらわれることなく自立した価値観を持つ聴衆を育てるのが目的です。

（音楽学科准教授）

＜ゼミ紹介＞

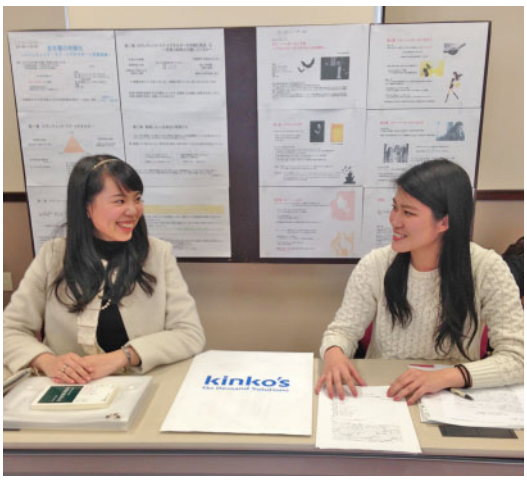
よく読み、よく考え、よく書く

渡部　充

文学、映画、音楽など幅広く英国文化を取り上げています。近年は学生の興味関心の広がりに合わせ、英国以外の大衆音楽（ロック／ポップス）や漫画、アニメーション作品なども対象として受け入れています。英国文化一般といわゆるサブカルチャー全般。万引き受けどころゼミといえるかもしれません。広範な領域が卒論の対象になるので、私が学生に何かを教えるというより、学生からいろいろ教えてもらうというスタンスで展開しています。

私自身、ビートルズをはじめとする音楽によって英国に対する関心が芽生えたということもあり、UK ロックの歴史を展望する授業をはじめました。音楽を卒論の題材とする学生も増えました。ただ、多くの学生が大衆音楽研究は簡単だと考えている様子なのは困りもの。音楽が好きというだけではエッセイは書けても、論文は書けません。幅広く読書をし、さまざまな領域の知見を援用し、クリティカルに作品を読み解く。よく読み（聴き）、よく考え、よく書く。文学研究となんら変わりません。対象に対する情熱は大切ですが、基礎的な能力が絶対に必要です。そうして養われたテキスト読解力、分析力、自分の考えを伝える力は、卒業後どのような分野に進もうとも汎用性の高い能力になります。人文系の学びが人気を落としてきているような印象ですが、役に立たなさそうなものが、長い時を経て意外と役に立つということを学生に伝えることが必要なのでしょう。

（総合文化学科准教授）



卒業論文ポスター発表

科学的、論理的な思考力をもった食いしん坊

高岡　素子

私たちの研究室は食品とヒトの関係について学ぶ「食品基礎科学研究室」です。所属学生の共通点は食べること大好きなことです。もちろん、教員の私も。理学館でいい匂いがしたなら、そこが私たちの研究室です。テーマとしては、発酵食品やアミノ酸の機能性、美肌や精神安定に関係する成分探索などについて主にヒトを対象として調べています。

研究室で重視していることは、「食べ物」に興味を持つことです。今年度、ゼミ生たちは兵庫県のプロジェクトである「おいしいごはんを食べよう県民運動」のキャンパスモニターとして活動しています。先日試食用として送られてきた兵庫県産のコメ５kgを炊飯し、大量のおにぎりを握り、全員でいただきました。この活動を通し、若者のコメ離れ、食糧自給率、地産地消などについて考える機会を得ることができました。また、各学年が１テーマを持ち、企業とのコラボレーションによる研究成果を基にした新商品の開発に取り組んでいます。楽しみながらのものづくりを通し、自分たちの無限の可能性を感じてくれることを願っています。

世の中には食に関する様々な情報が氾濫し、その中には科学的なエビデンスがない不確かな情報も含まれています。学生たちが自ら、頭、手、足をフルに使い、実験で検証する経験を通し、膨大な情報の中から信頼しうる情報だけを選択する能力を得て、今後の生活に役立ててくれることを期待しています。

（人間科学研究科食品基礎科学研究室教授）

青空のもと、ゼミ生全員でのおにぎり試食会

＜課外活動紹介＞

［クラブ］　クラシックギター部

部長

私たちクラシックギター部は、毎年愛校バザーや、大学祭で演奏させてもらっている他に、年に２回大きな演奏会を行っています。一つ目は、私たちが加盟しております、「関西学生ギター連盟」が主催している、「定期合同演奏会」です。関西学生ギター連盟というのは、関西大学・関西学院大学・大阪大学・神戸女学院大学の、４大学で構成されています。自身の大学の枠を出て、他大学と切磋琢磨して練習することで、技術も向上していきます。その中で、他大学との交流も深めることができ、お互いに良い刺激となる演奏会です。そして、二つ目は、私たちにとって、最も大切な演奏会で、私たち自身が主催している、「定期演奏会」です。今年で49回目を迎える事ができ、来年で50回目になります。この定期演奏会は、クラシックはもちろんですが、J-POPやアニソン、洋楽など、様々なジャンルの曲を演奏いたします。より多くの方々に、クラシックギターの音色、音楽を楽しんでいただけるような、そんな演奏を目指し、部員一丸となって練習に励んでおります。ほとんどの部員が、最初はギター初心者です。ですが、そんな私たちでも、このように大きな演奏会をさせていただくことができるのは、本当に感慨深いことです。これからも、これが当たり前とは思わずに、日々の練習を大切にしていきたいと思います。

第48回の定期演奏会　合奏演奏風景

［クラブ］ **書道部**

部長

私たち書道部は現在23名で活動しており、毎週水曜日に正筆会理事長の山根亙清先生の丁寧なご指導のもと、日々お稽古に励んでいます。一年間の活動として、春は読売書法展、全日本高校・大学書道展に出展するために、２メートルほどある大きな作品を書くのですが、正直精神的にも、身体的にも疲れてしまいます。しかし、その分、作品と自分自身が向き合えば向き合う程、少しずつ作品の出来がよくなっていくのを感じると嬉しく思います。また、夏は合宿をするのですが、今年は、泊まりなしの練成会を３日間行いました。暑く湿気の多い中にも関わらず、私たち部員は昼休憩以外みっちりお稽古に専念しました。その練成会で書いた作品を今年の秋の大学祭で展示しました。それと同時に、練成会で大学祭のために、筆を思い思いに走らせて合作（合宿での作品）も書きました。いつものお稽古では、先生に書いていただいたお手本をもとに、作品を書くのですが、合作は、筆の走らせ方、墨の黒と半紙の白の色の調和を楽しんで頂けるよう自ら工夫して書くため、難しいのですが、先生のご指導のもと、様々な筆の走らせ方を知るとともに、筆の面白さや楽しさを改めて実感しています。このように思えるのは、私たちを支えてご指導してくださる先生方、また、いつも励ましてくれる先輩、同輩、後輩がいるからだと思います。このようなあたたかい環境の中でお稽古できることに感謝しつつ、頑張りたいと思います。

今年の練成会の風景

中高部報告

J自治会による東京訪問

高等学部　１年生

私たち2015年度、2016年度Ｊ自治会役員27名は７月25日に東京を訪問しました。国際協力の分野で活躍されている卒業生を訪ねて、トーゴ共和国大使館及びJICAを訪問し、私たち中高生が国際協力のためにどんな貢献ができるかについてヒントを得るためです。訪問のために、トーゴ共和国、JICA、ODAなど様々なトピックについて事前学習を行った上での東京訪問でしたが、実際に卒業生にお会いして現場のお話を伺い、私たちの読むだけで得た知識と現実には大きなギャップがあることに気づき、衝撃を受けました。

トーゴ共和国大使館のボジョナ大使は中高部の礼拝に２度来られたことがありますので、トーゴに対して親近感を持っていましたが、実際に大使館を訪れることで、穏やかで陽気な国民性と独自の文化に短時間ではありましたが触れることができ、興味が深まりました。

JICAでは発展途上国での支援活動の体験談が印象的でした。「私たちが抱いているイメージと現実は必ずしも一致しない。先入観を持たず、相手が本当に必要としていることを考えることが大切」という言葉に感銘を受けました。

今回の訪問で学んだことを行動に移す第一歩として、トーゴ共和国への文房具寄付を始めたいと思いますので皆さんのご協力をお願いします。

引率の先生方、この貴重な機会を与えてくださったすべての方に感謝します。

初挑戦のオリンピック、そして新たなスタート

與那嶺　恵理

４年に一度のオリンピック。私が競技を始めて１年目、初めて出場した全日本選手権はロンドンオリンピックの選考レースでした。何も知らないまま走った私は、２位。それから４年後、全日本選手権で優勝し、リオオリンピックの出場権を獲得しました。４年前は、オリンピックを全く意識すらしていませんでした。そんな私が、国内外、様々なレースを走り、世界のレベルを肌で感じる中で、オリンピックは夢ではなく、目指すに相応しいとても価値のある目標に変わっていきました。４年に一度という日本中、世界中が盛り上がるオリンピックという舞台。そこへの挑戦が私をさらに成長させてくれました。

そして、迎えたオリンピック。ロードレース17位、タイムトライアル15位という結果でした。もっとできたという思いと、よく頑張ったという思いが複雑に入り混じる中で、私の初めてのオリンピックは終わりました。その終わりとともに、また４年後への挑戦が始まるんだなと、ワクワクを覚えました。４年後、2020年のオリンピックは、東京です！東京オリンピックで「メダル獲得」という目標に向けた、大きな挑戦をまたスタートさせています！

来年からは活動拠点をヨーロッパに移し、世界トップレベルでのレースにシーズン通して参戦します。日本から、神戸女学院から、私の走りを応援していただければ幸いです。

（中高部卒業生）

レース中の姿

高等学部校内大会

2016年度の高等学部校内大会は、１学期期末試験終了後の７月６日(水)に行われました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの５種目で、体育祭の縦割りとは違い全学年クラス対抗戦で試合が行われます。先輩に食らいつく後輩の勢いを、どう先輩が返り討ちにするのか、起きてはならない下剋上が起こってしまうのか、どの試合も白熱した好ゲームが繰り広げられました。天候にも恵まれ、最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る１日となりました。

ソフトボール
　１位Ｓ３Ａ　２位Ｓ２Ａ　３位Ｓ２Ｂ
バレーボール
　１位Ｓ３Ｂ　２位Ｓ２Ａ　３位Ｓ３Ｃ
バスケットボール
　１位Ｓ３Ｂ　２位Ｓ３Ａ　３位Ｓ３Ｃ
卓球
　１位Ｓ２Ａ　２位Ｓ１Ｃ　３位Ｓ２Ｂ
リレー
　１位Ｓ１Ｃ　２位Ｓ３Ｂ　３位Ｓ２Ａ

総合
　１位Ｓ２Ａ　２位Ｓ３Ｂ　３位Ｓ３Ａ
ブービー賞
　Ｓ１Ａ

（中高部保健体育科）

中学部校内大会

７月８日(金)中学部校内大会が行われました。開会礼拝後、各クラスの選抜メンバーによるリレーが行われました。どのチームも一生懸命で、バトンパスやスタートの練習を念入りにして、この日を迎えました。どのクラスも応援にも力が入っていて、盛り上がりました。リレーの後は、ポートボール・卓球・ドッジボールａ・ｂの３種目に分かれクラス対抗で試合が行われました。スポーツを通し、勝つ喜びや、負ける悔しさを学ぶ一日となりました。１学期の締めくくりとして、充実した時間をクラスの仲間と過ごすことが出来ました。

総合
　１位Ｊ３Ａ　２位Ｊ３Ｃ　２位（同点）Ｊ２Ａ
ドッジボールａ
　１位Ｊ３Ａ　２位Ｊ１Ｃ　３位Ｊ２Ａ
ドッジボールｂ
　１位Ｊ３Ａ　２位Ｊ３Ｃ　３位Ｊ２Ａ
ポートボール
　１位Ｊ３Ｃ　２位Ｊ２Ａ　３位Ｊ２Ｂ
卓球
　１位Ｊ３Ｃ　２位Ｊ３Ｂ　３位Ｊ２Ａ
リレー
　１位Ｊ３Ａ　２位Ｊ２Ａ　３位Ｊ２Ｂ

（Ｊ体育部校内大会係）

釜ヶ崎訪問に参加して

高等学部　３年生

６月11日、引率の先生方４人、Ｓ３：４人、Ｓ２：５人は花園町駅に集合して、いこい食堂へ向かいました。まずいこい食堂に着いたら、おにぎり作りをしました。皆最初は緊張していたせいか力強く握っていましたが、米加田先生の指導の下、少しずつ丸みを帯びた柔らかいおにぎりに仕上げていくことができました。おにぎりを作り終わると、次はスープに入れる野菜を切りました。普段すぐゴミ箱に入れてしまうような部分も、丁寧に食べやすい大きさに切っていったので、いかに自分が今までもったいないことをしていたのだと痛感しました。すべての作業を終えると、前半と後半で、四角公園に炊き出しをしに行く班と後片付けをする班に分かれました。炊き出しが終わった後は、いこい食堂で礼拝のときを持ち、いこい食堂の歴史や日本社会の現状などについてのお話を聞きました。

炊き出しをする際、私は野菜スープをお玉ですくって入れる担当に当たりました。私は必ず目を見て笑顔で挨拶してから、「どうぞ」と言って渡そうと意気込んでいました。しかしいざ炊き出しを受け取りに来る方を目の前にすると、手元にばかり集中してしまい、なかなか口が開きませんでした。私はただ単に黙ってスープを移動させてしかいなかったのです。私たちの分のスープを分けている、という姿勢では大きな壁が生まれてしまいます。その壁を取り除くことこそが、本当の意味で相手に寄り添うことであるはずなのに、私はそれができていませんでした。スープは元々決められた量を一人一人が持っていて、私たちはその分を本来あるべき場所に返しているのだと思います。人に借りたものを返す時にお礼を言うように、スープを渡すときに相手を思いやる言葉を発するのは当たり前なのだと気づきました。それからは自分の過ちを取り返すかのように、しっかり相手の目を見て声をかけて渡すことに励みました。しかしその時間はあっという間に終わり、後半の班と交代しました。

果たして私の考えや行動が正しかったのかはわかりません。しかし、ほんの短い炊き出しの時間が少しでも互いの記憶に残るような時間となっていれば幸いです。

夏の修養　白浜訪問報告

高等学部　２年生

７月25日から26日にかけて、白浜訪問に参加させていただきました。夏の修養会として今年度が初めてのこのプログラムは、白浜・三段壁にて、自殺予防や人命救済の活動を行っていらっしゃる白浜バプテスト教会の先生を訪ね、その活動の一端に参加させていただくという主旨のものでした。

私たちがお手伝いさせていただいた学童保育「コペルくん」では、30人ほどの子どもたちが毎日、宿題をしたり昼食を一緒に食べたりと楽しい時間を過ごします。観光地として有名な白浜ですが、その一方で、誰も居ない家で日中ひとりでご飯を食べる子どももいます。そのような状況をなくそうと、この取り組みが始められました。

実際にお手伝いした「コペルくん」や、他の様々な活動の一端を見せていただいたこと、夜に宿舎で先生とお話しの機会をもったことを通して一番印象深かったのは、人とのつながりによって人は生かされているのだ、ということです。普段の何気ない会話、気にかけてくれる人の存在、自分の居場所。目に見えないことほどその大切さを蔑ろにしてしまいがちです。絶望の淵に立たされているとき、自分を救いあげてくれるのは、人とのつながり、誰かの存在なのだということに改めて気づかされ、そして自分も苦しみのうちにある誰かに寄り添える存在でありたいと切に思います。

ここに来れば、笑顔で挨拶してくれる誰か、声をかけてくれる誰かがいる。子どもたちが「コペルくん」で共有する時間は、そうした誰かとのつながりの記憶でもあります。

彼らとの楽しい一時を過ごした私たちもまた、そのつながりの輪に加われたことを嬉しく思います。

今回の訪問にあたりお世話になったすべての方々への感謝とともに、この素晴らしい行事が来年以降も続くことをお祈りしつつ、白浜訪問報告とさせていただきます。

長島訪問に参加して

高等学部　１年生

長島は、悲惨な歴史を持つ荒廃した“負の地”であるという先入観を抱いて訪問に参加しました。しかしそこは灼熱の太陽の下、きらきら光る海に囲まれ、緑豊かな自然が美しい所でした。療養所にはスーパーや郵便局もあり、そのあまりにも日常的な風景に驚きました。入居者の方にこのことを話すと「この場所もここにいる人もあなたたちと一緒よ」と笑って仰いました。入居者の中にはハンセン病への偏見、家族との無情な別れに絶望して来た人もいる一方、これで同じ境遇の人と集えるという安心感を抱いて来た人もいます。捉え方は違えど、想像を絶する孤独を感じてきたことでしょう。しかし現在の彼らは、大変朗らかで生き生きと暮らしておられました。私がお話しした方も、趣味の書道は師範代という腕並み、旅行好きで毎年旅行にいくそうです。酷な話を伺うのかと思いきや、明るく逞しい彼らの姿に私はむしろ元気をもらったのです。そこに私は人間の力の強さを確信しました。彼らの卓越した芸術が、それを表しています。美の世界は自らの精神に新しい世界を形成し、それは自らのみでなく見る人の心をも豊かにするのです。孤独にあった人々が感性を分かち合い、切り開く世界は彼らの逞しさと美しさに彩られ私達を魅了します。人にはどんな逆境にあっても立ち上がり、苦しみから新しい未来を誘う力が確かに宿っているのです。

パンドラの箱に神様は悲しみ、憎しみ、争い、病気などの厄災と希望とを一緒に入れました。そして厄災がすっかり出切った最後に人は希望を見つけました。希望は、厄災があるからこそ見えるものであり、希望を希望と思える感性こそが希望であり、それが人の賜物だと思います。長島の地にあるのは“負の歴史”という一面だけではありません。人がいる限りそこには希望があります。長島に広がる生き生きとした自然がその証であると感じました。私達が見るべきは、ハンセン病に関する歴史のみではなく、その過去を超えて今輝いて生きておられる人の姿です。これからも長島が希望ある地でありますように。沢山の祈りのもと成り立ったこの訪問に感謝します。

修養会　広島訪問報告

高等学部　２年生

私が広島を訪ねたのは、今回が初めてだった。「安らかに眠ってください　過ちは繰返しませぬから」この言葉がずっと引っかかっていた。２日目の朝、平和記念公園に向かった。バスの窓から原爆ドームが見えてきた。テレビであれだけ見てきた光景が、そこにあった。広島の街は開けていて、青い空が近いところで広がっていた。原爆が落ちた朝と重なった。原爆ドームを間近に見た時、なぜか涙でドームが滲んだ。あまりにも痛ましかった。平和の灯は私に訴えかけるかのように、静かに燃えていた。それから核兵器廃絶の署名活動をした。中には、署名を拒む人がいて、私には、世界に核兵器があってもよいと思う人の考えを理解することができなかった。なぜ同じ人間を破滅するようなことをするのか、もう十分ではないか、と思った。昼食をとっていると、一人のおじいさんが声をかけてくれた。「私の家はこの近くにあってね、小さい頃はこの川で遊んだよ。僕の庭のようなものだな。」私は、その方が原爆ドームの傍を流れる川を自分の庭だと言い切ったことに驚いて、言葉が出なかった。午後には、広島平和記念資料館を訪ねた。館内には被爆者の遺品が数多く並べられていた。破れて布切れのようになったもんぺ、放射線の影響で抜けた黒い髪の毛の束、３歳の男の子が乗っていた黒焦げの三輪車、その日身に着けていた帽子や学生カバン、手帳や校章…。学生や幼いこどもの遺品には、とりわけ胸に迫りくるものがあった。「もっと生きたかったでしょうに。もっと勉強がしたかったでしょう。無念だったでしょう。」目にはどんどん涙がたまっていった。なぜ人間は戦争をするのだろう。どうしてこの人たちはこんな死に方をしなければならなかったのだろう。戦争なんてするもんじゃないと思った。どうしたらこの世界から戦争がなくなるのだろう。もし、私が生きている間に日本が戦争に突き進もうとしていたら、必ず反対の声をあげると誓おう。実際に広島を訪ねてみて私は、戦争をするとはどういうことなのかを突き付けられ、原子爆弾の威力はどれ程のものであるのかを嫌という程思い知らされた。日本人として、広島・長崎には一度と言わず、訪ねるべきだ。

リーダーシップトレーニングキャンプ

７月18日（月）～20（水）の２泊３日、生徒49名と引率の先生方６名で、山東自然の家にリーダーシップトレーニングキャンプ（リートレ）に行きました。リートレでは、来年度のＪ１デイキャンプ（Ｊキャン）で新入生を迎える準備のプログラムを行います。その活動を通して「リーダーとは何か」を考え、自分のなりたいリーダー像に近づくことがリートレの目標です。

初日は、Ｊキャンで新入生にジグソーパズルを制作させる企画を模した活動と、コミュニケーションアクティビティーを行いました。夕食は自炊しました。２日目は、館内でオリエンテーリングを行いました。その後チームに分かれ、与えられた議題にそって話し合う時間をもちました。夕食は食事コンテストを行いました。事前に自分たちで考えたメニューを作り、先生方に評価していただき、班ごとに競争しました。夜にはメディテーション・カウンセルファイヤーを行いました。３日目はレクリエーションで班のみんなと協力してゲームを楽しみました。

慣れない環境で、とまどいや不安もありました。しかし、そういった環境だからこそ得られることもありました。また４学年が集まって話し合い、意見を共有することで、新たな考えが生まれ、とても刺激になりました。リートレで学んだことを今後の学校生活、そして来年のＪキャンにつなげていきたいと思います。

（キャンプ長）

第16回訪豪語学研修旅行

8月2日(火)から20日(土)まで、高等学部希望者対象、訪豪語学研修旅行が行われました。最初の1週間は、ケアンズに2泊、シドニーに1泊旅行し、次の2週間は西オーストラリア州パースの姉妹校Methodist Ladies' College（MLC）を訪問しました。

ケアンズでの初日は、キュランダ鉄道で世界最古の熱帯雨林に行き、水陸両用車に乗って原生林の動植物を観察したりコアラと一緒に写真を撮ったりキュランダ村で自由散策を行ったりした後、スカイレールという小型のロープウエーに乗って熱帯雨林を真上から眺めながら山を降りました。夜には、夜行性動物の観察、曇のため満天ではありませんでしたが星空観察も行いました。2日目は、船でグリーン島へ渡り砂浜を散歩した後、グラスボートでグレートバリアリーフと魚たちを観察、運良くウミガメにも出会いました。翌日早朝にシドニーへ飛び、シドニー・タワー、ミセス・マッコーリー・ポイント、聖マリア大聖堂、ロックス地区等を観光した後、夕食後には、オペラハウスでモーツアルト作曲「コジ・ファン・トウッテ」を鑑賞しました。

翌日は、いよいよパースへ。ここからの2週間、生徒たちはMLC生のお宅に、教員は先生方のお宅にそれぞれホームステイし、学校生活を体験しました。登校2日目には、アッセンブリー・アワーで神戸女学院生の紹介がありました。生徒たちは2人1組でパワー・ポイントを使って日本についての紹介を行いましたが、事前準備の甲斐あって好評でした。2週間の訪問中、生徒たちは4日間登校し、ホストシスターと一緒に授業に出席したり、日本語の授業や小学生のクラスを訪問したり、神戸女学院生のための特別授業を受けたりしました。日本語の授業では、MLC生と一緒にオーストラリアや日本についてのグループ対抗クイズに興じたり、書道の授業のお手伝いをするなどMLC生との交流を楽しみました。また、特別授業では、オージー・イングリッシュの授業、アンザック・ビスケット作り、オージー・フットボールの試合など現地ならではの体験をさせていただきました。とりわけ印象的だったのは、アボリジナル・アートの授業です。MLCの先生方がアボリジニーのアーテイストを特別講師としてお招きくださり、そのご指導のもと2枚の大きな点描画を製作しました。登校日の他に、MLCの先生方が1泊の小旅行、3回の日帰り遠足にご引率くださいました。小旅行では、マーガレット・リバー地区のナチュラリステ灯台、ニルギ鍾乳洞、チョコレート工場に行きました。灯台最上階から見下ろしたインド洋の眺めは迫力満点でしたし、ニルギ鍾乳洞の中では天然の音響効果と神秘的な光に包まれてディジュリドウの演奏を聴きました。遠足では、ピナクルズの奇岩の間を散策し、野外でハンバーガーを作りました。また別の日には、スワン川を船で下ってフリーマントルへ行きました。この日は晴天で景色を眺めながらの船旅は最高、野生のイルカにも遭遇しました。フリーマントルでは、ディジュリドウのレッスンを体験し、マーケットで買い物を楽しみました。3回目の遠足は大雨の一日でしたが、カバシャムのワイルド・パークで羊の毛刈りショーやカンガルーの餌やりをしました。最後の登校日には、晩に寄宿舎の食堂でさよならパーティーが開かれました。3名のMLC生が日本語で、神戸女学院の生徒代表2名が英語でそれぞれスピーチをし、ホストファミリーに花束を贈呈した後、感謝の気持ちを込めて「よさこい・ソーラン節」を踊り温かい拍手をいただきました。パース滞在最終日、生徒たちは半日ホストファミリーとともに過ごし、午後MLCに集合。ここで別れを惜しみつつバスで飛行場へと向かい帰路につきました。参加した20名のS1の生徒は、昨年度末に参加が決まってから様々な準備を重ねる間に培われたチームワークを生かし、気持ちの良い集団生活を送っていました。MLCの方々からもお褒めの言葉をいただきました。来年度はMLCの皆さんを神戸女学院にお招きします。MLCのCody校長、日本語担当のAshby先生をはじめ、MLCの教職員、生徒、保護者の皆様、旅行中にお世話くださった添乗員の皆様、全ての方に心から感謝いたします。引率は2名でした。

（中高部教諭）

夏山登山

今年の夏山登山は、唐松岳・五竜岳登山の予定で、参加者生徒45名（Ｊ２～Ｓ２）、教員９名の54名が集まりました。

１日目、バスで白馬村に到着、近くにコンビニがある宿舎にて、翌日からの登山に備えました。

２日目、６時発のゴンドラ、リフトを乗り継ぎ、途中で朝食をとりながら、一気に標高1,850m まで上がりました。歩き始めは整備された木道でしたが、八方池で休憩した後は山をトラバースしながら徐々に高度をかせぎ、昼前には唐松頂上山荘に到着しました。残念ながら霧と小雨で360度の景色は堪能できませんでしたが、全員が頂上を踏むことができました。下りでは雷のためリフト運休のハプニングもありましたが、無事宿舎にたどり着きました。

２日目の夜、「翌日はいよいよ五竜岳！」と意気込んでいたところでしたが、山頂付近は激しい雷雨の予報であったため、生徒の安全を第一に考え、ガイドの意見も聞き、五竜岳登山は中止で１日早く帰るという決定を下しました。

山小屋で夜を過ごしたり、御来光を拝んだり、岩場を這い上がったりという、例年と同じような夏山登山の醍醐味を味わうことはできませんでしたが、唐松岳を１日で登ったという経験はこれからの糧になるのではないでしょうか。伝統ある夏山登山がこれからも様々な方のご協力のもと、安全に実行していけるよう願っています。

（夏山登山ディレクター）

2016年度エンパワーメント・プログラム報告

８月１日（月）から５日（金）、毎日９時より15時まで、トリニティホールにて、Ｊ２からＳ１までの36名を対象に「女性のためのエンパワーメント・プログラム」が開催されました。株式会社 ISA の企画により昨年度、第１回を開催し、好評を得て、今年度は２回目の開催です。昨年度同様、アメリカの名門女子大の学生７名をリーダーとして招き、少人数のグループに分かれて、英語で話し合い、発表する中で、自分の今までの人生を振り返り、将来の目標について考え、自分を見つめ直すいい機会となりました。国際社会の様々な分野で活躍する女性に必要な語学力、思考力、発表力を楽しみながら磨くことができ、参加者の満足度は非常に高く、嬉しく思いました。このプログラムで得た多くのヒントを様々な場面で活かしていってほしいと願っています。リーダーたちのホストファミリーを引き受けてくださったご家庭の皆様、参加者のご家族の皆様に感謝申し上げます。

（国際教育委員会）

このプログラムは英語で考えを表現する訓練になったとともに、過去や現在、未来の自分と向き合い見つめ直す良い機会になりました。ライフマップ作りでは過去の経験を振り返り、それらが自分にとってどんな意味を持っていたのかが明確になりました。また、プレゼンやスキット作りを通して、人前で意見を英語で言うことに慣れ、皆で協力して一つのものを作れたということが自信につながりました。将来、身に着けたいことやなりたい人物像を具体的に考えることができ、とても良い経験ができました。

（高等学部　２年生）

教職員研修会

個人情報保護のため、一部削除しています。

2016年度文化祭　“Palette”

文化祭企画実行委員長　高等学部　３年生

今年度は“Palette”をテーマに文化祭を行いました。天気予報では直前まで雨予報でしたが、文化祭の２日間のみ見事に晴れ、特に大きなトラブルもなく無事に進めることができました。

今年も学年やクラスではそれぞれの個性を充分に活かした様々な展示やゲームが行われました。準備を進める中で深まった団結力や１つにまとまった雰囲気がお客様にまで伝わり、たくさんの方に楽しんでいただけたのではないでしょうか。クラブや有志団体でもそれぞれの熱意が伝わるすばらしい展示や舞台が行われました。文化祭を最後に最高学年が引退するクラブも多く、思いの詰まった展示や舞台は見る人を魅了し、本人たちにとっても見る人にとっても思い出に残る感動的なものであったことと思います。

神戸女学院生も来てくださるお客様も、関わる全ての方が楽しめるような文化祭を目指して、文化祭企画実行委員会でも様々な工夫をしてきました。

毎年恒例、神戸女学院について詳しく知ることができる「ジョガコレ」に加え、今年は神戸女学院生の新たな一面を多くの方に知っていただくため、「探究・スピーチ発表」「数学甲子園」「模擬国連」などの活動報告を行いました。たくさんの方に来ていただき、大変好評であったと思います。

校外用文化祭最後のエンディングでは美しく飾られた藤棚で様々なパフォーマンスが行われ、文化祭を締めくくるのにふさわしいものとなりました。また、昨年度から地道に会議や作業を重ねて作った装飾は文化祭をよりいっそう華やかにしてくれました。階段や天井に施された細やかな装飾を見て立ち止まるお客様も多く、やはり装飾はこの学校の文化祭の魅力の一つであると思いました。

中高部には様々な行事があります。その中でも文化祭は、舞台や展示など、それぞれ一つのものに向かって全力で取り組むことのできる数少ない行事の一つです。クラブで、クラスで、意見を出し合いながら長い時間をかけて計画し、準備し、練習する。その過程では激しい議論になったり、意見の違いに涙することもありますが、その分、何物にも変えられない達成感を味わうことができます。文化祭への関わり方は一人一人違うにせよ、最終的に全てが一つになって完成した文化祭に文企長という立場で関わることができて嬉しく思います。

文化祭テーマ“Palette”には、それぞれの持つ“Palette”を用いて文化祭に自分たちの色をつける、という意味が込められています。文化祭を作り上げる過程は決して色鮮やかとは言えない、地道な努力の連続でしたが、校内生はもちろん先生方や来てくださるお客様のおかげで、16日と17日の２日間は中高部が色鮮やかに染まりました。生徒それぞれが色々な思いを抱えながら一生懸命準備してきた努力が実り、笑顔あふれる素敵な文化祭となりました。

校外からお越しくださった3,000人を超えるお客様、そしてこの文化祭を支えてくださった全ての方に心から感謝します。本当にありがとうございました。この文化祭が多くの人の心に色鮮やかな思い出として残っていたら幸いです。神戸女学院らしい素敵な文化祭がこれからも続いていくことを願っています。

芸術鑑賞会

今年度の芸術鑑賞会は、Osaka Shion Wind Orchestraによる演奏を鑑賞しました。

長い歴史と伝統を誇り、日本三大吹奏楽団の一つと称されるOsaka Shion Wind Orchestraの演奏は力強さと繊細さをあわせもち、普段は吹奏楽になじみの薄い生徒にとっても新たな印象をもって受け入れられたように感じます。

演目は「ファンファーレとアレグロ」に始まり、ハンガリー舞曲やスラヴ舞曲など、管楽器の響きのはえるクラシカルな曲目が続いたのち、荘厳で劇的な「祝典のための音楽」で第一部は終了しました。

第二部は、スターウォーズメドレーから始まる、親しみのあるメロディーが一層の迫力をもって会場に響き、ユーフォニウムの音色の美しい「You raise me up」、体育祭のBGMでおなじみの「Tank!」、そしてバリー・マニロウの「コパカバーナ」では、手拍子という形で生徒・教員・保護者共に参加し、大いに盛り上がりました。

そうしていよいよ最後の曲「宝島」では、本校のブラスバンド部よりSの生徒20名が舞台に上がり合同演奏を行いました。たとえ短い時間でも、プロと同じ舞台に立つということは、部員たちにはもちろん、それを観る生徒たちにとっても、それぞれにきっと貴重な経験となったことと思います。

（視聴覚委員会）

J1 秋の遠足

徳島県鳴門市の大鳴門橋遊歩道「渦の道」と大塚国際美術館にバスで向かいました。今年は午前中に渦が見えやすいということで、大鳴門橋遊歩道「渦の道」を先に見学しました。お天気にも恵まれ、大鳴門橋を背景にクラス写真を撮り、渦の道へ。大渦とまではいきませんでしたが、少し渦の巻いている様子が見られたようです。その後、すぐ近くにある食堂で学年礼拝をもち、昼食となりました。鳴門大橋の下で採れた鯛のお刺身やわかめ、鳴門金時など当地の特産がたくさん詰まったお弁当でした。早く食べ終わった生徒は階下のお店でお土産を買う人もいました。昼食後は大塚国際美術館へ。始めにクラスごとに学芸員のレクチャーを受けました。熱心にメモをとって、事後学習に備えている姿もありました。その後は班ごとに自由見学。事前に学習したことや聖書の授業で習ったことも思い出しながら、思い思いに広い館内をまわっていました。一昨年に訪れた時、この美術館の図録「大塚国際美術館300選」を29冊いただきましたが、今年もまた20冊いただきました。帰りは事故渋滞があったため、ルートを少し変更しましたが、ほぼ予定時刻に帰着することができました。学びあり、行き帰りの車中はバスレクで盛り上がり、楽しい親睦の時ともなりました。参加者は生徒142名（欠席２名）、引率教員は８名でした。

（Ｊ１学年主任）

J2 秋の遠足

さわやかな秋空の下、バスで奈良方面へ行ってまいりました。法隆寺に到着後、中門前で写真撮影の予定でしたが修理中でしたので、南大門前で撮影し、その後各自見学しました。生徒たちは事前に荻先生からお手製の冊子を配布していただいて学習していたので、それを元に法隆寺の七不思議を探したり、建物のつくりを確認しながら見てまわっていました。その後奈良市内へ向かい、柿の葉寿司やそうめん入りのお味噌汁など奈良の特産物が詰まった昼食をいただき、昼食後は班ごとに自主研修を行いました。東大寺、春日大社、興福寺、新薬師寺、元興寺のいずれかの寺社をめぐりながら奈良の町をゆっくりと散策したようです。朝方は少し冷え込みましたが昼間は日差しも温かく、よい気候に恵まれた中で充実した時間を過ごせたのではないかと思います。今年は毎年懸案となっていた帰着時間が遅くなることの対策として、自主研修の時間を少し短く設定した結果、予定通り17時には解散することができました。

引率教員は６名でした。

（J2B担任）

J3 小旅行

J３小旅行では、金沢・飛騨高山方面へ行き、一人の欠席もなく全員で参加することができました。１日目は石川県小松市にある加賀伝統工芸村、ゆのくにの森にて輪島塗や友禅染、九谷焼、金箔貼り、ガラス工芸、和紙の手漉きなど加賀の伝統的な工芸品を作る体験をしました。時間のゆるすかぎり複数の工芸体験をした生徒も多かったようです。夕方からは１日目の宿泊所である辰口温泉のたがわ龍泉閣にて金城大学短期大学部幼児教育学科教授の和泉美知枝先生より「金沢の歴史と文化について」と題して講演をしていただきました。兼六園の名前の由来など一般に言われている以上に詳しく伺うことができ、生徒たちもよく聞いていました。

２日目は兼六園で解散後、忍者寺とも言われている妙立寺に行く班と金沢商業高校の生徒に案内していただく班に分かれて市内を自由に散策しました。その後白川郷へ移動、ここでも自由に散策する時間を持ちました。２日目の宿泊場所、ホテルアソシア高山リゾートではテーブルマナーを学びながら夕食をいただき、夕食後にさるぼぼ作りをしました。講師の方々に手伝っていただきながら全員が自分のさるぼぼを完成させてとても喜んでいました。

３日目は高山市内の陣屋を見学後、市内を自由に散策し、時間通りに集合、帰途につきました。旅行委員を中心に生徒中心で進めていく大きな行事でしたが、皆自分の役目をしっかりと果たせました。

（J3A担任）

S1 一泊研修

爽やかな秋晴れの中、今年度S1は近江八幡での一泊研修に出発しました。

初日は昼食の後、彦根城や隣接する博物館などを見学、ひこにゃんのパフォーマンスにも触れ、各々が和やかなひとときを過ごしました。その後は近江八幡国民休暇村に直行、先生の刺激的な発題のもと、ランダムに分けた班ごとに話し合いの時を持ちました。テーマは「恋愛と結婚」そして「将来どんな大人になりたいか」。普段はあまり話さない本音が出たり、互いの意見に爆笑したりと充実した時間になったようです。話し合いの後はすき焼きを食べてレクリエーションへ。S1の多才なメンバーによる出し物や体育祭の組別対抗のゲームなど、大いに盛り上がりました。

二日目は班ごとに話し合いの成果を発表。本音とタテマエ？を交えて、将来の理想像や現実の厳しさなどが披露される中、発題者の先生と結婚したいという人も。終了後は休暇村を出て、近江八幡の町並みを自由に散策しました。ヴォーリズ建築や近江八幡の古い町並みを眺めつつ、さまざまなお菓子にも舌鼓を打ちました。そして、鮎家の郷で昼食をとり、追分にある八ツ橋本舗で工場見学や試食を楽しんだ後、西宮北口にて解散となりました。

盛りだくさんのメニューが用意された今回の研修でしたが、有意義な一泊二日を大きな問題もなく終えられたことに感謝しています。引率は7名でした。

（S1A担任）

S2 修学旅行

10月10日（月）から14日（金）まで、4泊5日で長崎から山口まで行ってまいりました。1日目は新幹線で新大阪から博多へ、そこからバスで伊万里・伝統産業会館に行き、マグカップの絵付け体験をした後、琴海へ。ホテル到着後大村湾を背景にクラス写真を撮影しました。2日目は班別自主研修で、軍艦島、ハウステンボス、長崎市内自由散策などをした後、ホテルニュー長崎で原爆被爆者の方による体験講話を聞きました。3日目は柳川川下りをした後、御花でうなぎのせいろ蒸しをいただき、そこから門司港を経由して西長門へ。ホテルは全室オーシャンビューで、CMなどでもお馴染みの角島大橋を窓から眺めることができました。4日目は角島大橋を渡って、角島灯台を見た後、青海島、金子みすゞ記念館を見学し、萩市へ向かいました。昼食後、松下村塾を見学し、その後は班別自主研修で、各自史跡や博物館を見学していました。夕食後はレクリエーションをし、ダンスや歌、ゲームなどで大いに盛り上がりました。5日目は秋吉台展望所に立ち寄った後、秋芳洞を見学し、その後安富屋で河童蕎麦をいただきました。午後はクラスごとに時間差を作ってサビエル聖堂・菜香亭・瑠璃光寺を見学した後、新山口駅に向かい、そこで解団式をしました。

参加生徒は138名。引率は教員6名と看護師1名、添乗員3名でした。

（S2学年主任）

S３秋の遠足

10月14日（金）、京都嵐山に行ってまいりました。

午前８時10分に西宮北口の兵庫県立芸術文化センター横を出発し、名神高速道路、京滋バイパスを経由して、まず「八つ橋庵ししゅうやかた」に行きました。そこでは八つ橋、ねりきり、亥の子餅の３つのグループに分かれ、和菓子作りを体験しました。生地を蒸したり、餡を丸めたりするところから始め、成型まで自分自身で行い、友達と出来上がった和菓子を見せ合ったり写真を撮ったりして盛り上がって楽しみました。

再度バスに乗車して嵐山に行き、渡月橋前で各クラス集合写真を撮影した後、昼食までの間、自由に嵐山の街を散策しました。

12時25分に昼食会場である「渡月亭」に集合し、礼拝を守った後、京懐石「京の玉手箱」（小鉢、御造里、温物（湯豆腐）、玉手箱（２段のお重）、吸物、御飯、水物（フルーツ等）を、会話を弾ませながら美味しくいただきました。

昼食後はほぼ予定通り13時45分に現地で解散し、その後は各自自由に、お土産を買ったり、観光したりしました。

天候に恵まれ、特にトラブルもなく、無事に秋の遠足を終えることができました。

参加生徒は128名（全員参加）。引率教員は６名と添乗員１名でした。

（S３B担任）

校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、Ｊ２とＳ２は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、以下のように入選作を決定した。また、校内選考で決定された優秀作は兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選３名（☆印）、入選３名（◇印）に入賞した。

11月15日（火）の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、Ｓ２Ａの生徒が自作の朗読をした。

（中高部図書室司書教諭）

個人情報保護のため、
一部削除しています。

個人情報保護のため、一部削除しています。

中高部 キャンパス見学会

11月19日土曜日、キャンパス見学会が行われました。雨の予報にその準備もしていましたが、幸いほぼ傘いらずの天気の中、多くの来校者（1205人）があり、盛況でした。

午前中は、中学入試説明会、学校説明会（生徒による英語スピーチ、探究優秀研究発表、卒業生によるスピーチ）、中学部自治会メンバーによるキャンパスツアーなど学校を紹介するプログラムを中心に進め、午後は授業や学校生活を体験していただけるよう、教員による模擬授業や、生徒によるクラブ活動を中心としたプログラムで行われました。

また各教科の授業の内容や目標、成果などを体育室で展示し、教員が来校者の質問に答えるようにしました。各教科の学びの深さ、ユニークさに触れ、もう一度学び直したいと感じたという来校者の声もありました。

神戸女学院中高部の魅力を少しでも多くの方に伝えたいという思いで成り立っているこの行事は、逆に日々この学校で過ごす私たちにも、その素晴らしさを改めて再認識させてくれます。それぞれの催しや活動の中の生き生きとした手伝い生徒の姿と、それを憧れの目で見つめる小学生たち。私たちはこうした純粋な存在に支えられていることを、このキャンパス見学会では痛感します。

秋の岡田山キャンパスの美しさと共に、私たちの「思い」をお伝えできた一日であったと思います。

（校務課）

「秋の子ども会」報告

去る11月23日、神戸女学院を会場にして、秋の子ども会が開催されました。当日は、有志のグループリーダーと本校高等学部の新旧役員会のメンバーが入念な準備をして、神戸真生塾の子どもたち13名の到着を待ちました。

朝10時過ぎに開会、今回の実行委員長であるS3生徒による開会祈祷がなされた後、子どもたちは屋内で、S化学部の指導の下、本格的な実験器具を用いた人工イクラ作成に熱意を注ぎました。その後はポップアップカード作り、折り紙や塗り絵に興じつつ、それぞれが「自分だけのお姉さん」とのひとときを満喫したようです。

お昼は、S役員会の新メンバーが腕によりをかけたハヤシライスとポテトサラダが試食室にて振るまわれました。お代わりする人も続出し、お腹も心も満足できるひとときとなりました。

昼食後は、外でボール遊びや大縄飛びをしてパワー全開、楽しい時間を過ごしました。そして、午後2時過ぎに、役員会メンバー手作りの牛乳プリンをいただいた後、子どもたちは、多くのお土産を抱え、本校のスタッフに見送られ、笑顔で帰って行きました。

スタッフの尽力で、すべてが非常にスムーズに進行した一日でした。秋の子ども会を成功に導いてくださったすべての方々に心より感謝申し上げ、「報告」とさせていただきます。なお、引率教員は3名でした。

（高等学部役員会顧問）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ **Ｊ卓球部**

中学部　２年生

Ｊ卓球部では、火・木・金・土曜日に、年に７回ある公式戦に向けて日々練習をしています。日々の練習では、先輩と後輩が一緒に練習をし、先輩が後輩に丁寧に教えるので、お互いに成長し合うことができます。また、公式戦だけでなく練習試合もたくさんあるので、力がどんどん上がってきていることを実感できます。そして夏の合宿では淡路島へ行き、４日間思う存分卓球に打ち込むことができ、花火などの様々なイベントもあって、とても充実しています。「明るく、楽しく、けじめをつけ、青春をすることができるクラブ」を目標に楽しく、時には厳しく日々練習しています。これからもお互いに励まし合い、さらに上を目指して頑張っていきます。

［クラブ］ **Ｊ演劇研究部**

中学部　３年生

私たちＪ演劇研究部は、年に３回舞台を上演しています。役者はもちろん、台本や照明などの裏方も全て部員が手がけています。

文化祭ではオリジナルの学園ものの劇を上演させていただきました。特に校外用ではたいへん多くのお客様に入っていただけて、とても嬉しく思っています。

普段の部活では、練習はキチンとやりつつ、学年をこえて仲のいい部活です。今後の舞台も楽しみにしていてください！

［クラブ］ **Ｓ漫画イラスト研究部**

高等学部　２年生

Ｓ漫研について

私達は年に二回、バザーと文化祭で部員全員が描いた原稿を自ら印刷した部誌、缶バッジなどを販売しています。こういった品物は毎年開店と同時に本当にたくさんのお客様にご購入いただいており、部員にとってこの二つのイベントは普段の部活動の大きなモチベーションとなっています。年に二回の合宿の中で、美味しい食事を囲みつつ共に一体となって原稿を描く事は学年間の親睦も深め、互いの向上に励むことのできる貴重な機会です。

皆が同じ目標に向かい、その結果が形となって残る事の達成感はかけがえのない経験であり、とても大切な思い出です。この気持ちを忘れずより良い作品をお届けできるようこれからも頑張っていきます。

［クラブ］ **Ｓ文芸部**

高等学部　１年生

Ｓ文芸部について

私たちＳ文芸部は、年に２・３回冊子を発行しています。それらの冊子はバザーや文化祭などの学校行事の際に広く校内・校外の方に読んでいただいていますが、部員が書く作品のジャンルがそれぞれ違うので、他の部員が書いた作品を読むのは冊子発行時の部員自身の楽しみでもあります。

今後はクラブ活動中に書いたリレー小説を冊子に載せたり、リポグラム（ある特定の文字を使わないで文章を書くこと）をしたりして、新しい形の冊子にも挑戦していきたいと思っています。

〈学 院 日 誌〉

9 月 7 日㈬	中高部教員会議
9月16日㈮(校内用)・17日㈯(校外用)	中高部文化祭
9 月21日㈬	中高部教員会議
9 月27日㈫	中学部入試説明会
9 月28日㈬	理事会
9 月30日㈮	中高部教員会議
10月 1 日㈯	神戸女学院特別講演会 「石戸コレクション」からふりかえる神戸女学院
10月10日㈪～14日㈮	高等学部修学旅行
10月12日㈬～14日㈮	中学部小旅行
10月14日㈮	教授会
10月19日㈬	中高部教員会議
10月26日㈬	理事会 臨時評議員会 臨時理事会
11月 2 日㈬	中高部教員会議
11月16日㈬	中高部教員会議
11月18日㈮	教授会
11月19日㈯	キャンパス見学会
11月30日㈬	理事会 中高部教員会議
12月16日㈮	中高部教員会議 教授会
12月21日㈬	理事会

目 次

つながりと変革の時…… 1
神戸女学院特別講演会「石戸コレクション」でふりかえる神戸女学院… 3
キリスト教学校教育同盟　第６回中堅事務職員研修会報告… 3
神戸女学院家庭会報告…… 4
春季公開講座報告…… 4
2016年度　愛校バザー会計報告…… 5
学院リトリート報告…… 5
2016年度　宗教強調週間…… 6
KCC だより …… 8
新任のことば…… 9
史料室の窓・学院史の歴史…… 10
留学報告…… 11
人事・慶弔・栄誉・永年在職者表彰・記念賞… 12
新刊紹介…… 13
その他の新刊一覧…… 13
キャンパスお気に入りの場所…… 14
大学報告
料理研究部×自治会食堂メニュー提供…… 15
学生と企業による地域活性化の取り組み「にしのみにゃ部」に参加して… 15
子どものための七夕コンサート…… 16
第10回心理相談室ウィーク講演会報告「「いじめ」について考える」… 16
企業・業界研究ワークショップ…… 17
Kobe College & Mozarteum Friendship Week 2016… 17
地域創りリーダー養成プログラム（副専攻）報告… 18
留学生紹介…… 18
受入れ留学生報告…… 19
派遣留学報告…… 20
語学研修報告…… 23
音楽学部夏期講習会報告…… 25
保護者懇談会報告…… 26
夏期インターンシップ実施報告…… 26
インターンシップ参加報告…… 27
2016年度秋季大学教授会研修会報告…… 28
大学クローバー賞表彰式…… 28
2016年度「めぐみ会賞」 …… 29
私の研究…… 29
ゼミ紹介…… 30
課外活動紹介…… 31
中高部報告
Ｊ自治会による東京訪問…… 32
初挑戦のオリンピック、そして新たなスタート… 33
高等学部校内大会…… 33
中学部校内大会…… 34
釜ヶ崎訪問に参加して…… 34
夏の修養　白浜訪問報告…… 35
長島訪問に参加して…… 35
修養会　広島訪問報告…… 36
リーダーシップトレーニングキャンプ…… 36
第16回訪豪語学研修旅行…… 37
夏山登山…… 38
2016年度エンパワーメント・プログラム報告… 38
教職員研修会…… 39
2016年度文化祭 “Palette” …… 40
芸術鑑賞会…… 41
Ｊ１秋の遠足 …… 41
Ｊ２秋の遠足 …… 42
Ｊ３小旅行 …… 42
Ｓ１一泊研修 …… 43
Ｓ２修学旅行 …… 43
Ｓ３秋の遠足 …… 44
校内読書感想文コンクールについて…… 44
中高部 キャンパス見学会 …… 46
「秋の子ども会」報告 …… 46
課外活動紹介…… 47
学院日誌…… 48